東日本家族応援プロジェクト＋（プラス）2022　を開催しました！

人間科学研究科教授　村本邦子

東日本大震災から 12 年目で第 2 ラウンドを迎えた「東日本家族応援プロジェクト＋（プラス）」を 2022 年 9 月 2 日（金）から 6 日（火）の 4 泊 5 日で開催した。第 2 ラウンドは福島中心にプロジェクトを継続することになったが、多賀城（宮城県）では、現地の有志が実行委員会を立ち上げ、自主的にプロジェクトを続けてくれることになった。それで、多賀城にも立ち寄って合流した。

今回は院生 18 人、総勢 22 人という大人数で、コロナ禍の状況も厳しく、心配することも多かった。現地の方々へのご迷惑を含め、大所帯での移動には懸念もあり、4 班に分け、基本的に班単位で行動すること、受け入れ先や会場の状況によっては、参加者数を制限し、自由なフィールドワークを多く取り入れるなどの工夫を図った。結果的には、人数が多かった分、多様なフィールドワークが行われ、多様な視点で報告が成され、メンバーの小さな物語が豊かに重ねられた。主な行程は下記のとおりである。

9 月 2 日（金）

この日のメインプログラムは、黒松市民センター（仙台市）にて、みやぎ民話の会との交流会だった。みやぎ民話の会顧問の小野和子さん、元双葉町住民の目黒トミ子さん、加藤恵子さん、島津信子さんからお話を聞かせて頂いた。

並行して、せんだい 3.11 メモリアル交流館、震災遺構荒浜小学校、石巻アートフェスティバルなどのフィールドワークが行われた。

9月3 日（土）

この日のメインプログラムは、①おおぞら保育園（トレーラーハウス）で、プロジェクト実行委員の丸山隆さん（多賀城市教育委員会）と黒川恵子さん（おおぞら保育園）との交流会　②多賀城市文化センターで、団士郎漫画展と漫画トーク、防災コンサートに参加した。なお、漫画展は 8 月 27 日（土）から 9 月 11 日（日）まで開催されていた。会場となったおおぞら保育園（トレーラーハウス）は、私たちのプロジェクトが 2012 年に初めて訪問し、黒川さんと出会った場所である。当時、このトレーラーハウスで保育が行われていた。多賀城市文化センターは、多賀城での最初のプロジェクトを開催した場所である。翌年より会場は多賀城市立図書館へと移り、以後、現在まで、当時館長だった丸山さんが本プロジェクトを引き継いでくださっている。

今回は、漫画展開催時より、NHK が張りつき取材し、院生たちも取材を受け、何度か放映された。そのうち Web 記事にもなっているものを下記に紹介しておく（いつまで視聴可能かは不明）。プロジェクトを広く知ってもらうとともに、院生たちにとっては、マスコミがどのように取材し、それがどのように切り取られて社会に発信されるのかということを学ぶ良い機会にもなったと思う。

宮城 NEWS WEB　仙台放送局「被災地で続く家族漫画展　多賀城」2022 年 8 月 27 日
https://www3.nhk.or.jp/tohoku-news/20220827/6000020714.html

宮城 NEWS WEB　仙台放送局「京都の大学院生　津波で前回の保育園長から震災学ぶ」2022 年 9 月 4 日
https://www3.nhk.or.jp/tohoku-news/20220904/6000020815.html

宮城 NEWS WEB　仙台放送局「震災を描かない漫画展　被災地で支持されるのはなぜ？」2022 年 9 月 12 日
https://www3.nhk.or.jp/tohoku-news/20220912/6000020929.html

NHK 知っトク東北「被災地を描かない漫画展　支持される理由は」2022 年 9 月 16 日
https://www.nhk.or.jp/sendai-blog/telemasa/473468.html

おおぞら
保育園

おおぞら

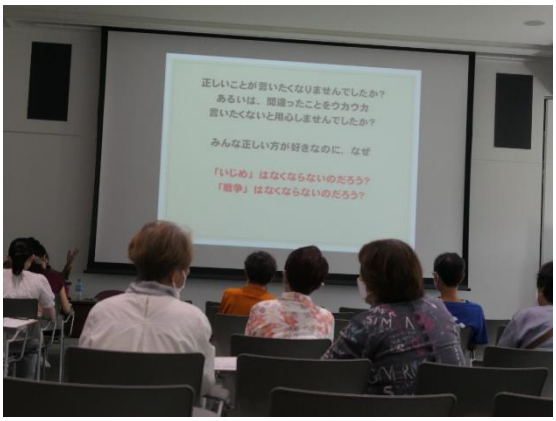
多賀城市消防局による避難訓練コンサートに参加した後は、自由なフィールドワークの時間とし、NPO 法人タガの柵による「都市型津波を学ぶ 3.11 語り部ツアー」への参加や、東北歴史博物館、松島などへ訪問した。夜のうちに白河へ移動。

9 月 4 日（日）

白河市立図書館（りぶらん）にて、「東日本・家族応援プロジェクト＋プラス 2022 in 白河」を開催した。昨年に引き続き、NPO 法人しらかわ市民活動支援会との共催、一般社団法人未来の準備室、特定非営利活動法人ビーンズふくしまの協力を得た。ボランティアの高校生たちも合流し、業務分担して、全員で協力運営した。プログラムは、「あそびのひろば」（しらかわ語りの会によるふるさとの民話、ライアーアンサンブル・ドルチェによるライアー演奏、鵜野祐介による手遊び唄とお手玉あそび)、「おもちゃであそぼう」、団士郎漫画展と漫画トークである。なお、こちらでは、8 月 29 日（月）から 9 月 4 日（日)、漫画展が開催された。

その後、共催、協力団体であるビーンズふくしまのふくしま子ども支援センター、おひさまひろば、一般社団法人未来の準備室のみなさま、しらかわの高校生ボランティアたちとの交流会を持った。「ママカフェ＠しらかわ 震災 11 年を聞く」や未来の準備室コミュニティ・カフェ EMANON による高校生振り返りのためのワークショップの企画もあった。

終了後、マイクロバスでいわきへ移動。夜は古滝屋の温泉で疲れを流す。


正しいことが言いたくなりませんでしたか?
あるいは、間違ったことをウカウカ
言いたくないと用心しませんでしたか?
みんな正しい方が好きなのに、なぜ
「いじめ」はなくならないのだろう?
「戦争」はなくならないのだろう?

ままカフェ@しらかわ
震災11年を聞く

もしも私が、
のび太だったら
こんな道具を
出してもらいたい!
(自分で考えた道具でもOK!)

9月5 日（月）

沿岸部フィールドワークのメインプログラムは、宝鏡寺にある伝言館を訪問。伝言館館長で宝鏡寺第 30 代住職の早川篤雄さん、副館長で立命館大学名誉教授の安斎育郎先生のお話をお聞きし、伝言館を見学した。並行して、また、終了後、グループに分かれての自由なフィールドワークがあり、東日本大震災原子力災害伝承館、震災遺構請戸小学校、東京電力廃炉資料館の視察、双葉駅周辺、富岡町散策などが行われた。

夜は、古滝屋にて、全員揃っての交流会、体験の分かち合いの時間を持った。

9月6 日（火）

最終日は、全員で「古滝屋震災考証館Ｆスタディーツアー」に参加した。いわき湯本温泉古滝屋第16代当主里見喜生さんのガイドのもと、考証館を案内頂いた後、マイクロバスで、いわき、福島、震災や震災後のことなど聞かせてもらいながら、富岡町を中心に回った。夜ノ森駅周辺、富岡アーカイブなども案内頂き、。4 時間ほどのツアーとなった。終了後にプロジェクトを解散した。

報告が大部となるため、各プログラムの詳細は記さなかったが、以下、院生たちの報告のなかに個別の体験が記されている。今回、私自身にとってとくに印象的だったのは、双葉町

の光と陰だった。実は、今年の 6 月にも福島県沿岸部を訪れ、特定廃棄物埋立処分施設の見学をしたのだが、昨年末まであちこちで眼にしていた黒いフレコンバックの山がどこにも見られなくなっていたことに驚いた。これは、たしかに復興計画に沿っており、住民にとっては少なくとも悪いことではないと思う。それでも、見えなければ問題はなくなったのかと言えば、必ずしもそうではない。道路上の線量計もあきらかに間引かれていた。8 月 30 日に帰還困難区域にある特定復興再生拠点区域が避難解除され、今後いったいどうなっていくのだろうかと訝しく思いながらの再訪だった。

私たちが双葉町を訪れた 9 月 5 日は、ちょうど駅前に双葉町役場新庁舎がオープンした日で、駅前には芸能人が来ており、テレビカメラが入っていた。役場の中にも立ち寄ってみたが、昼休み中だからか電気を消し、暗い中で、たくさんの職員が弁当を食べたり、パソコンに向かったりしていた。聞いたところによると、ここには百人の職員がいるという。今回解除された双葉駅裏に回ってみると、公営住宅はまだ工事中だったが、10 月に完成すると 27 世帯入ることができ、20 世帯はすでに決まっているという。9 月 3 日に交流したみやぎ民話の会、元双葉町民の目黒トミ子さんが、いわきにある双葉小中学校を訪ねて欲しいと提案してくださったので、9 月 6 日、プロジェクト解散後に足を運んだ。中学生たちは、ちょうど、オープンしたばかりの双葉町役場や学校に行き、帰ってきたところだった。当時の記憶はない子どもたちがほとんどだろう。家庭によるが、一度も双葉町に行ったことのない子どもたちが少なくないという。双葉中学出身の先生が思わず冷蔵庫を開けたら、ものすごい臭いが充満したそうだ。原発事故から 12 年半経って、初めて開けられた冷蔵庫の話は生々しく、何とも言えない気分になる。一人の女の子が、「将来、ここに帰ってもいいかな」とつぶやいたという。

帰還困難区域を車で走っていると、緑のシートをかぶせたフレコンバックを見つけることができた。周囲には木が生え始めていて、人が帰ってこないところでは、時間経過とともにフレコンバックを包み込んだ森になっていくのだろう。双葉駅周辺のごく一部だけを切り取ってみれば、ピカピカの新しい町の誕生の物語になるが、その場所からほんの少しだけ離れると、まったく異なる風景が見えてくる。福島に関心を持って遠方から短い時間で訪問する人々は、見えるものから、復興の物語を受け入れるかもしれない。そうなれば、復興したのに帰還しない人々は、それぞれが好きな選択をしているだけだと考えるだろう。双葉町のある人が、「自分たちは避難しているのではない。避難させられているのだ」と言った。そのことのリアルを知って欲しい。

今回のプロジェクトは、人数が多いぶん苦労も多かったが、それでも、現地に行くことが院生たちに与えるインパクトは大きい。この経験をそれぞれがまた次の一歩につなげてくれることを願っている。こうして私たちのプロジェクトを継続させることができるのも、現地で出会い、親交を深めてきたみなさまのお陰である。ご縁に感謝し、これからも大切にしていきたいし、証人としての役割を少しでも果たしていけたらとあらためて思う。

２０２２年、変化の町で

客員教授　団士郎

２０１１年、このプロジェクトを開始した頃と、２０２２年開催を迎えた私は同じではない。それはあらゆることに言える経過時間による変化で、わざわざ書くことでもない。書かなければならないのは、それ以外の変化の特異性、メカニズムの特殊性、偏りに関する気づきのことである。

１０年以上通い続ける東北各地は、この間、様々な変化を遂げてきた。地元の人たちの本意、不本意に関わらず、それは具体的に姿を変えた風景として現れた。同じ場所を訪れても、以前を思い出すのが難しくなってしまっているところが少なくない。人が新しい風景になじんでいくのはやむを得ない事である。

そんな中で、今年初めて気づかされたことがあった。それは上書きされていく変化の何重層にもなった現実で、どこから切り取っても異なる風景の断面になりそうな事実だった。だから今ここに書くのも、その一面に過ぎない。

長らくにもほどがあるが１０年以上も、避難指示が出たままで、帰還困難地域とされてきた双葉町は、近隣のいわき市内に町役場を設置して町行政を行ってきた。そしていわき市内に双葉町立小学校と中学校を設置した。

全町民があちこちに避難し、中でも多くの人たちが暮らすことになったいわき市。広大な面積のいわき市にはそのキャパシティがあったのだろう。市内各地に点在する町民は便宜的にいわき市民であり、双葉町民でもある二重住民登録者になった。

双葉町からいわき市への転出を選択した人も当然ある。その場合は、必然的に居住地域の学校に、子どもたちは通学する。それは一般的な転居、転校である。

しかし住民票を移さず、いわき市で暮らす双葉町民の子供たちは、地域の学校に通うことも、双葉町立の学校に通うことも選択することができるそうだ。そして双葉校を選んだときは、いわき市全域からスクールバスで通学することになる。

「現在、いちばん長くバスに乗っている子は片道１時間」と校長は語る。中学校在籍生徒１０名未満、小学校在籍児２０数名という現状である。

長くなった避難暮らし。多くの子供たちは双葉町で生活したことがない。聞いていると、両親世代、祖父母世代にとっての故郷に、家族として殉じているように思えて仕方なかった。

いよいよ帰還が２０２２年９月１日から開始された。駅前の新築町役場庁舎を訪れてみたが、１００人の職員が戻って働いているそうだ。そして現在、帰還所帯数は二家族だという。駅前に新しく建てられた住宅ゾーンには、順次住民が戻ってきたり、他県からの新規移住者もある予定らしい。

当然、今後も変化してゆく現在の切り口でしかない。しかしこれは最初に述べた、何事も変化すると語る普遍性と相似形だろうか？自然に任せておけば、そこに起きる変化、回復の姿がこれだろうか？

人は様々な出来事に対して、その時々に対策をうつ。だがその策が自然の摂理にかなっていない時、しばしば大きな代償を求められるのではないか。

帰還制限が解かれて、10 年ぶりに地元中学校に足を踏み入れたという校長は、双葉中学校には立派な体育館があって、バスケットボールコートが二面取れて、二階には観覧席があったと言い、隣接して武道館もあったと語った。そこが１０年以上立ち入ることもできなくなり、隣接市の仮設校舎で過ごすことになった。

「これが学校？！」、「これが保育園？！」、と思わず声が出てしまうような立派な建物を、福井県美浜原発のそばで、青森県下北半島の原発のそばでも見たなぁと思って聞いていた。

東日本・家族応援プロジェクト＋（プラス）2022　フィールドノーツ

文学部教授　鵜野祐介

１．全日程を振り返る

これまでは大体２泊３日のツアーだったが、今回は４泊５日ということで、企画されたプログラム数も多く、とても濃密な時間となった。全日程のうち、ぼく自身がかかわったものを簡単に振り返っておこう。

◇９月２日（金）宮城県仙台市　午後：黒松市民センターにて
みやぎ民話の会の皆さんの話を聞く。
◇９月３日（土）宮城県多賀城市　午前：旧おおぞら保育園舎トレーラーハウスにて
丸山隆さん、黒川恵子さんの話を聞く。
午後：多賀城市民センターにて
「団士郎漫画トーク」「コンサートで避難訓練」
◇９月４日（日）福島県白河市　白河市立図書館にて
「東日本家族応援プロジェクト＋2022 in 白河」
午前：ワークショップ「あそびのひろば」を開催
午後：「団士郎漫画トーク」（⇒別行動で根田地区の安珍堂見学）
「ままカフェ＠しらかわ」小磯厚子さん、三浦恵美里さんの話を聞く。
「コミュニティ・カフェ EMANON」湯澤魁さん他のワークショップ見学
◇９月５日（月）午前、楢葉町「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館」見学
午後、双葉町「東日本大震災・原子力災害伝承館」見学
◇９月６日（火）いわき湯本温泉　古滝屋「原子力災害考証館 furusato」見学
Ｆスタディツアー（「とみおかアーカイブ・ミュージアム」見学、他）

その全てについてここでコメントすることはとてもできないので、「丸山さんと黒川さんの話をうかがって」、「白河プログラム『あそびのひろば』を開催して」、「４つのミュージアムをハシゴして」、以上３つに絞って書き留めておきたい。

２．丸山さんと黒川さんの話をうかがって

ぼくがこのプロジェクトにはじめて参加したのは 2013 年のこと。10 月上旬に多賀城市を訪問した際、丸山さんと黒川さんにもその時はじめてお目にかかった。丸山さんは当時、市立図書館の館長さんで、黒川さんは現在と同じ、おおぞら保育園の園長先生だった。それからずっと「織姫と彦星」のように、年に一度お会いしてきたが、2020 年と翌 21 年はコロ

ナ禍や個人的事情のために訪問できず、今回 3 年振りの再会となった。最初の出会いから９年が経ったが、お二人の印象は変わらない。「誠実」「謙虚」「笑顔」、これら３つの言葉がお二人にはよく似合う。

２回分のブランクはあったにせよ、残りの７回は毎回言葉を交わしてきたはずなのだが、用意されたプログラムをこなすことに気を取られていつも慌ただしく時間が過ぎ、腰を落ち着けてゆっくりとお二人のお話を伺うことはこれまでできていなかった。今回、２日の夕食をお二人と立命の教員３名および事務局の平田さんとの６名でご一緒し、また３日の午前中にはお二人の体験された「３・１１とそれからの物語」を院生たちと一緒にじっくり伺うことができて、ようやく念願が叶った気がしている。

３日のお話の中で、それぞれ特に印象に残った言葉から。

（丸山さん）「おかしなことを書きますが、私は全く疲れておりません！　確かに肉体的な疲労の蓄積は多少ありますが、心はとても充実し、元気です！　なぜなら、《悲惨》という言葉を上回る《感謝の出会い》があったからです！・・（中略）・・必ず元気な東北、強い多賀城を築き上げ、支援して頂いた皆さんに感謝の恩返しをして参ります」（震災翌月の４月７日、長野県から１週間応援に来てくれた県職員が帰途に就くにあたり丸山さんが送信したメールの文面。この日の配布資料より）。「これが 10 年経った今も、変わらない私の思いです」とこの日のお話を締め括られた丸山さんに、一人の人間としての気高さを感じた。「感謝の出会い」と「感謝の恩返し」、胸に刻んでおきたい。

（黒川さん）「この 10 年間、頑張って来れたのは、もっと生きたかったのにそれが叶わず亡くなられた方々の無念を晴らしたいという想いがあったからだと思います」。黒川さんの心の中には、親しくされていた、亡き人たちのいのちが生き続けている。そして彼女は、折に触れてその人たちに話しかけ、叱咤激励を受けながら、「きっと大丈夫」と明日を信じて、前を向いて生きてこられたに違いない。次の歌が思い出される。「あなたを失くした悲しみと　あなたと出会えた喜びの　２つと共に生きていく　あなたと共に生きていく」（半崎美子「深層」より）。

３．白河プログラム「あそびのひろば」を開催して

これまで、多賀城において 2019 年までの数年間、「民話と絵本と遊びのワークショップ」と題して、民話の語り、絵本の読み語り、伝承遊びとわらべうたの実演を行ってきた。今回のプログラムは基本的にこれをモデルとして策定し、10 時から 11 時 30 分までの１時間半を「手遊び唄」「ふるさとの民話」「ライアー演奏」「お手玉遊び」の４つの演目で構成し、その後の 30 分を「ホッと一息　おもちゃで遊ぼう」の自由遊びとした。

当日を振り返ってみると、手前味噌ながら全体として成功だったように思うが、一番の要因は「おひさまひろば」副代表の小磯厚子さんがご準備下さったウレタンマットのスペースが程よい広さだったことである。５～6 組の親子連れがこのスペースの中に入ってくださっ

た。途中、話に集中できず、動き回ったり、声を挙げたりする子どももいたが、伸び伸びと過ごしている様子がこちらにも伝わってきた。特に今回、民話の語りをして下さった「しらかわ語りの会」会長の鳴島あや子さんは、長年保育士をしておられたとのことで、幼い子どもの扱いに慣れておられ、指人形や手遊びをアドリブで挟みながら上手に進められたのには感心した。

時間配分としては、ライアーの演奏をもう少し短くしてもよかったかもしれない（20 分→15 分）。あるいは、行進曲風の歌や子どもたちが一緒に口ずさめるような歌（例えば「さんぽ」など）を入れてみてはどうだろうか。

ぼくが担当した「手遊び唄」と「お手玉遊び」は、親子ともども楽しんでいただけたようでうれしかったが、家に帰ってからも遊べるように、歌詞カードを渡したり、欲しいという方にはお手玉を差し上げたり、といった「お土産」をつけてもよかったかもしれない。また、院生たちには、事前ミーティングを開くなどして、歌や遊び方をある程度習熟しておいてもらうと、当日の進行がよりスムーズになると感じた。来年以降の課題としたい。

プログラムの最後に自由遊びの時間を配置したのは、小磯さんの慧眼である。設定保育と自由保育がセットになることで「保育」としてのバランスが取れるということを再認識させられた。

準備段階から当日の設営・進行・片付けに至るまで、小磯さんにフル回転していただいたお陰で無事終了できた。改めて「ありがとうございました！」と言いたい。

４．４つのミュージアムをハシゴして

９月５日と６日の両日、原発事故に関連する４つのミュージアム、楢葉町「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館」、双葉町「東日本大震災・原子力災害伝承館」、いわき湯本温泉古滝屋「原子力災害考証館 furusato」、富岡町「とみおかアーカイブ・ミュージアム」を見学した。

４つのミュージアムの設置年・主体・目的については、村本邦子編『災厄を生きる』（国書刊行会 2022）の第六章「福島第一原発事故の記憶はどのように構築されていくのか」(河野暁子、村本邦子共同執筆)の表１「福島第一原発事故を扱った主なミュージアム」(171 頁）に紹介されており、また本文の中でも、それぞれのミュージアムの特徴に関する筆者たちのコメントが詳しく述べられているので、そちらを読んでいただくことにして、ここでは、ぼく自身の主観的で素朴な感想を綴っておきたい。

第一に感じたのは、原発事故という同じ出来事を対象にしているにもかかわらず、４つの施設の視点が四者四様であるということで、どれか一つの見方が正しくてそれ以外は間違っているとは決して言えず、複眼的な思考の大切さを痛感させられた。それはまた、大きな声と小さな声、活字になった声と活字にならなかった声、客観的で理知的な声と主観的で情

緒的な声、叫びとつぶやき、そうした対極的な性格を持った声の両方を聞くことの大切さと言い換えられるかもしれない。

第二には、上に列挙した内の後者に属する声は、遠く離れた地で暮らす者にはなかなか聞こえて来ないということである。福島を訪れ、見て聞いて触れて味わって匂いを嗅いでみてはじめて体感できる《声》である。実は、ぼく自身これまで、３・１１以後の福島を訪れることにためらいがあった。けれども、そうした《声》を聴くことができた今、現地を訪れて本当によかったと実感している。

このことに関わって痛感したのが、継続して訪れることの大切さである。このプロジェクトの立ち上げ以来、11 年以上にわたってこの地を訪れてきた主要メンバーの村本さん、団さん、平田さんには、年１回以上の訪問（定点観測）によって蓄積してきた、変わりゆくものと変わらないものの両方に対する眼差しがあり、また現地の方々との交流を通して築いてきた「心のネットワーク」（信頼関係）がある。遅ればせながら、ぼくもその環に加わることで、これからも継続して、福島の《声》をより多くの人びとに届けていく役割を担っていければと期している。

５．来年度以降に向けて

最後に、来年度以降の展望や課題について挙げておこう。まずは先ほど書いたように、継続して訪れるということである。大学院の授業として成立させるためにクリアすべきことは数々あるが、実施することを大前提として、村本さん、団さん、平田さんと相談しながら進めていきたい。

もう一つは、今回丸山さんや黒川さんとはじめてじっくり話ができたという感覚を、他の現地の方々とも持っていけるよう、あまり日程を詰め込みすぎないでプログラムを組んでいけたらと思う。それはわれわれ教員だけでなく、院生たちと現地の方々が歓談できる《あそび（すき間）》の時間も取りたいものだ。もちろん、院生と教員との《あそび》の時間ももっと取れるといい。

そして三つ目に、今回白河で現地の高校生たちや彼ら／彼女たちをサポートする大学生たちと立命の院生たちが交流する時間があったが、このような、若者たち同士が同じ未来を担っていく当事者として対話し触れ合う機会を設けることを、この「プロジェクト＋（プラス）」の「＋（プラス）」の部分として大事にしていく必要があると感じている。それが、これまでこのプロジェクトに協力し支援して下さった全ての皆さんへの、ぼくたちなりの「感謝の恩返し」だと信じて。

私が東北で学んだこと

人間科学研究科 臨床心理学領域 M1 赤木ちさ

私が今回宮城県と福島県にてフィールドワークを行い、１日１日非常に濃く深い学びの経験をさせて頂いた。全てのプログラムで繋がる部分や共通することも多く、東日本大震災や原発事故を超えて“人”として多くのことを学ばせて頂いた。その中でも特に印象的だった３つの経験について、自身の内省した内容も含め述べさせて頂こうと思う。

まず１つ目は、福島県の名産物である桃・梨・林檎の話である。班の３人のメンバーでお昼に、白河駅に隣接する「えきかふぇ」という喫茶店でお茶をした。午後に担当のすべきプロジェクトがあったことから、あまり遠くまでフィールドワークに行くわけにもいかず、近場で済まそうということでこのカフェにお邪魔させて頂いた。女子３人でカフェに行ったこともあり、ケーキやジュースを頼み、普通に色々な話をして盛り上がっていた。メニューにあったジュースでは、福島で有名な桃・梨・林檎の三種類がおすすめされており、私は梨のジュースを頼み、残りの２人は桃のジュースを頼んでいた。この様なただ観光に来た人の様な、たわいもない行動や会話を交わしている内に、私は当たり前のことに改めて気づかされた。私達は福島に観光に来たわけではなく、現地で東日本大震災や原発事故について学ばせて頂く為に福島に訪れた。そのことから私は自身の頭の中に「福島＝震災・原発事故」という構図が勝手に成り立っていたことに気がついた。もちろん上記で挙げた様に、福島には原発による問題や課題は山積みであり、それを抜きにして語ることはできないだろう。しかし当たり前に福島県も日本の４７都道府県の１つであり、その土地の名産品や有名な食べ物、名所が存在する。この様な「当たり前のこと」について、私は一切目を向けていなかったことに、このカフェでの素朴な経験から気がついたのである。これはおそらく私が現地に足を踏み入れたことで分かったことであり、これを多くの人に知ってもらうことで、「震災・原発」というものだけでない、当たり前の福島の観光的側面を再起するきっかけになるのではないかと感じた。

またこの経験は「震災を忘れてほしくないけど」という語りや、「勝手に嫌でも“震災後何年”という新しい年号を与えられる」という語りと繋がる部分があるのではないかと感じた。もちろん震災があったこと、原発事故があったことは忘れない。このプロジェクトで「証人になる」という目標を掲げていることからも、これからも東日本大震災と原発事故について自分の中でアンテナを貼りつつ、長く関心を持ち続けていきたいと考えている。しかし、それだけが福島ではない。震災・原発＝福島ではなく、それらはあくまで福島の一部であり、その中でも非常に大きな出来事であった、という捉え方がフィットするのではないかと感じた。１日目に多賀城で訪問したワインバーでも、そこのマスターが「色々な事業や活動があって、それらが何らかの形で復興に繋げようとしている」という語りがあった。様々な領域・分野の取り組みが復興に繋がっており、それらは全て復興への１つの糸口であることが

分かった。福島の色々な名産物や場所、事業、取り組みが復興に繋がっている。原発や震災の直接的な解決や議論だけでなく、震災以前から人々が営んできた事業や活動を通して、今の福島や東北は変化を遂げてきているということを忘れてはならないと感じた。

TOKIO が福島の桃の宣伝をしているポスター

2 つ目は、伝承館に訪問させて頂くに当たって、双葉町を歩いて散策していた時のことである。まず私は双葉町の街並みに驚きを隠せなかった。前後左右どこにも人がおらず、誰も住んでいない建物ばかりがあり、言葉は悪いがまるで廃墟の様な街並みが日本にあるとは思いもしていなかったからである。私はこの双葉の町に足を踏み入れた時に、原発事故の残した大きな問題を思い知ることとなった。この双葉町という土地に足を踏み入れ、この目で見た景色は、私の人生の中で非常に大きな衝撃だった。メディアでは到底学べなかった感覚が一気に自分の中で喚起された気がした。新しい住宅や建物さえも建っていない、本当に震災直後から時が止まった様な街並みであった。

この様な双葉の町を歩いた話の中で、私が伝えたいことは「目に見えない放射能を浴び続ける恐怖感」である。はじめ双葉駅に到着した際に、双葉駅構内の空間線量率は 0.075μSv/h だった。しかし伝承館（沿岸部）に向けて歩いている内に、道端にあった測量計では 1.16μSv/h であった。

双葉駅構内の測量計

伝承館までの間の測量計

私はとても怖くなった。「今自分の体は大丈夫なのか？」という恐怖だった。今すぐ身体のどこかに異変が出なくとも、これがもし何年か後に病気になるきっかけになったらどうしようという不安もあった。正直なことを言うと、私自身がこの様な気持ちになるとは考えもしなかった。このプロジェクトに参加する時点で福島県に訪問させて頂くということはもちろんわかっていたし、放射能についても他の都道府県よりも高いところに行くという理解はもちろんしていた。しかしこの不安感は、福島から避難した方々、福島に戻ってきた方々、今現在戻ろうか迷っている方々全てが考えておられることと類似するのではないかと思った。そして２日目の白川のプロジェクトでお話しいただいた、子をもつお母さん方のお話が頭をよぎった。震災後に子どもと福島に住み続けたことについて「これで良かったの

か」という思いや、他の県に避難していたけど、いざ帰るとなったら足がすくむ思いなど、私が双葉町で感じたことと少し繋がっている部分があるのではないかと感じた。この双葉町は一週間前から「住める」様になった地域である。しかしこの目で見た景色は人が住むには到底程遠い光景であったことを忘れてはならないと感じた。ただ人が住めば良いなのではなく、薬局や病院という医療機関、コンビニやスーパーなどの日用品を買える場所など、これから双葉町に必要な施設・課題は山積みである。私はここで見た景色をこれからも忘れず、双葉の復興に関心を持ち続けたいと感じた。

双葉町の地割れした道路

３つ目は、「感謝」の話である。この５日間を通して様々な方々のお話を聞く中で、どの方々にも共通していることが「周囲の人々への感謝」であった。お話ししてくださった皆さんが口を揃えて、感謝の言葉を口にされていることが非常に印象的だった。災害時に来てくれたボランティアの方々への感謝、今現在もずっと来てくれている村本先生や団先生への感謝、福島に訪問させて頂いた私たちへの感謝、自分達のいつも周囲にいてくれる人々への感謝など、本当に「感謝」という言葉や態度がしみじみと感じられた。これはお話してくださった方々がもともとその様な素晴らしい方々だったからなのか、震災による経験からなのかはわからないが、周囲への「感謝」の気持ちが溢れている土地だと感じた。はじめ私は、「震災や原発事故という本当に大変な思いをされたにも関わらず、こんなに周囲の人々に目を向けて感謝することができるって本当にすごい」と思っていた。しかしそれはもはや逆なのかもしれないとも思った。震災や原発事故という本当に苦しい時こそ、周囲の方々に感謝の気持ちを持つということが重要であると、お話を聞かせて頂いている内に感じた。感謝をすることで自分自身が救われるという単純なものではないことは理解しているが、それくら

い「感謝」というものがもたらす相互作用の影響は非常に大きいと痛感した。災害時というとてもストレスフルで緊張感の漂う環境である時に、他者から感謝されること・他者に感謝することで、困難な状況を乗り越えられる“強さ”に繋がっているのではないかと感じた。

また今回、出会いお話を聞かせていただいた方々を通して、人生において感謝することの重要性、困難な中でもそれをどの様に捉えて生きていくかで、人は大きく異なってくるということがよくわかった。もちろん震災や原発事故は無かった方が良かった。それは周知の事実であろう。数えきれないほど広範囲の被害と、大量の死者と行方不明者を出し、取り返しのつかない事態となった。しかしこれを人生の一部として見た時に、私が出会った東北の方々はそこで止まっていなかった。街や物理的な状況では震災時のまま止まっていた部分もあったが、そこにいる人々は決して止まっていなかったのである。生かされた命を大切にし、自身の使命感を燃やして情熱的に生き、眩しいくらい私には輝いて見えた。今回沢山の東北の方々のお話を聞かせて頂き、「良い出来事でも悪い出来事でも、それをどうするかは自分次第である」ということを非常に強く感じた。この５日間で学んだことは東北のことや、震災・原発のことだけではない。“人”としてどの様に生きるのか、自分自身のこれまでの生き様や将来を考える大きなきっかけと学びになった。

以上が、私が東北のプロジェクトとフィールドワークを通じて学んだ、特に印象に残った経験である。この様な学びの機会を与えてくださった村本先生と団先生をはじめ、このプロジェクトに関係する先生方に深くお礼申し上げます。そして何より、この５日間で私たちに多大なる学びと成長のきっかけを下さった東北の方々全てに、心から感謝申し上げます。
ありがとうございました。

宮城・福島での学び

実践人間科学領域 M1　石黒 和

9 月 2 日から 6 日までの実習を通して、様々な学びを得た。ここでは実習を通して印象的であった学びを取り上げながら、東日本大震災を語り継ごうとしている人々の思いに注目し、述べていきたい。

語り継ぐということ　民話の会

語り継ぐことの大切さや難しさ等は 9 月 2 日と 3 日の活動を通して感じられた。9 月 2 日は仙台市で民話の会の方々からお話を伺った。今回お話を伺うまでは、民話は昔話であり、震災と関係するような教訓を教えてくれる民話を話してくださると思っていた。しかしお話を聞いているうちに、民話は必ずしも昔話や教訓めいたものではなく、語り手が語り継いでいきたいと思ったものを、証人として伝えて続けているものであることを学んだ。豆粉のお話やおしまいの話のようにユーモアのあるお話から、震災の後に新聞に載っていた投書、震災後の新たな被害に関する話のように幅広く「伝えていきたい」話が民話である。語り継がなければ、世間話として流されて消えてしまうということも話されており、また私たちの周りにも民話がたくさんあるというお話もあった。実習を通して自分の語りたいことを見つけたいと思った。

9 月 3 日はおおぞら保育園で、園長の黒川さんと丸山さんからお話を伺った。地震直後から状況を詳しく話してくださった。丸山さんは 3 月 11 日の夜から中学校の班長として、避難生活を安定させようと尽力されてきたことを話してくださった。黒川さんは、避難しているときに子ども達は誰も泣かなかったとお話ししていた。子ども達が緊張を感じ取り行動していたこと、とても負担であったであろうと思った。

そして誰とも語らなかったら薄れてしまうということ、忘れてはいけないことを残すことの難しさについてお二人が話されていた。プロジェクトの度に気持ちをリセットしているというお話もあった。薄れていくことは自然なことであったとしても、「残していきたい、忘れてはいけない」という思いから、気持ちを切り替えて震災に向き合うということはとても大変なことである。そして覚悟を要することであろう。

一方でお二人が震災によってお話を聞きながら、本当に震災があったのかあまり実感が湧かなかった。トレーラーハウスの周りの建物や道路はとても綺麗に整備されており、地震が起き、津波が到達した場所であることは一見分からない。しかしながら街が新しく綺麗に整備見えるのは、震災によって街を作り直さざるをおえなかったためである。丸山さんのお話の中で「目に焼きつけた記憶は身体に焼きつけた記憶であり、テレビからは日常生活の大変さは伝わらない。」というお話があった。私には身体に焼きつけることは難しく、お二人のように震災を捉えることは難しいと思った。

見えていても気づかない

9月4日にフィールドワークで小峰城跡を訪れた際には、ただ見ているだけでは気づかないということを体験した。まず小峰城跡を一通り探索し、その上でガイドの方からお話を伺った。ガイドの方に教えていただいて初めて、震災による小峰城の石垣の被害に関する説明がされた展示があることに気づいた。その展示は私たちが利用した入り口とは反対の入り口近くにあり、ガイドの方に話しかけることなく小峰城跡を去っていれば震災の爪痕に気づくことはなかったであろう。

そしてガイドの方からは、草や苔が生えているところは石垣が崩れなかったところであり、生えていないところは石垣の崩落により新たに積み直したところであるという説明があった。この説明を受けて石垣を観察してみると、石垣が崩壊した部分と崩壊しなかった部分を理解することができた。また3月11日の地震では幸い怪我人が出なかったが、石垣は通路の方にも転がっていったため、震災後には柵が設置されたとのことであった。小峰城跡付近は道路も整備され、最初は震災の爪痕を一見把握することはできなかった。しかしガイドの方のお話により、震災による被害を実感することができた。ガイドの方に話しかけることがなければ、何の発見もなくフィールドワークを終えていたことであろう。現地を訪れるだけでは気づくことができない部分を、現地の人々からお話を伺うことで見えるようになるという貴重な体験をした。

小峰城の石垣。草や苔の生えていない部分は地震で崩れた。地震によって石垣が崩壊し、人が怪我をしないように柵が出来ている。

本当の復興とは

伝言館で早川和尚や安斎先生から伺ったお話からは、復興の意味を考えさせられた。廃炉が終われば復興するというわけではない。廃炉作業で取り出された燃料デブリは、数万年という時間が経過しない限り生物に悪影響を与え続ける。そして安全に燃料デブリを補完するためには、冷却し続けなければならない。福島第一原発の事故のように、冷却装置が停止してしまうことで、新たな惨事が生じてしまう。廃炉作業が終われば人々は安全な生活を送ることができると思い込んでいたが、危険にさらされていることに変わりはないということが衝撃的であった。

お二人からは反対運動が事故を防ぐことができなかった悔しさと、これからの原発事故を防止するためにも人に伝えていこうという気持ちが伝わってきた。早川和尚と安斎先生の出会いは 1973 年であり、半世紀に渡って原発の反対運動をしてきたこと、1975 年から行ってきた裁判では地震や津波によって生じる原発事故の危険性について指摘してきたのに対し、判決では「原告の言うことは想定できなくはないが、全国の原発を動かすことが不可能となるために想定しない」という判決を下された等をお話ししてくれた。そして原発事故が起こってしまった。国に対して抗ったが牙を向けなかった悔しさを、2018 年に碑として残したという。また原発事故が発生した 3 月は海に向かって風が吹いていたために被害は抑えられており、幸運な事態であったことを知り、時期によっては被害が広がった可能性があることを初めて知った。

震災遺構請戸小学校

伝言館でお話を聞いた後、請戸小学校と東日本大震災・原子力災害伝承館を訪問した。マイクロバスを利用して伝承館の近くで降り、その後レンタサイクルを利用して請戸小学校を訪問した。心地よい風を感じながら自転車を走らせる。工事に関わる人や工事車両等以外は見当たらず、だだっ広い感じ。おそらく昔は住宅が建ち並んでいたのであろう。

請戸小学校ではただただ圧倒された。窓枠が歪み、壁が剥がれ、11 年前の津波によって一変した様子が表されていた。かつては学校として機能していたことが伝わり、なんとも言えない気持ちになった。そして津波による浸水域の表示がいくつかの点で見られた。徐々に近づいて写真を撮ろうとすると、見上げなければ写真に収めることができなかった。津波が差し迫ってくる恐怖を感じられたような気がした。

2 階で行われていた展示の 1 つには、震災から 10 年が経過したことに際して、請戸小学校の生徒であった方々が書いた作文が並べられていた。印象的な作文があった。「『請戸』の地名が付く住所にまた住むことができたのは、感慨深いものだった。同時に、困惑した。暮らせど、暮らせど、浪江に帰った実感が全くと言ってもいい程湧かなかった」「あの校舎は、震災前の私達の記憶と、震災後の記憶、両方を深く刻み、そしてそれらをつなぎとめてくれる唯一の存在なのだと強く感じた。」2 階での展示を見て、伝承館に向かおうと階段を降りると、また津波の浸水域の表示に出会った。思わず「うーん」とうなってしまった。

請戸小学校の時計塔。近づくほど津波の高さと恐ろしさが伝わってくる

1 階から 2 階へと続く階段の踊り場に示されていた浸水域

泥だらけになったパソコン・糸切りばさみ・支出内訳書

東日本大震災・原子力災害伝承館

複雑な気持ちを抱きながら東日本大震災・原子力災害伝承館に訪れた。周りに家はほとんど建っておらず、人も居ない閑散とした場所で近代的かつ大きな建物が建っているのも奇妙であった。

まず大型スクリーンで俳優の西田敏行のナレーションとともに原発の建設から事故とその後までが紹介されていた。あんなに大きなスクリーンで映像を観ることがなかなかないので驚いた。そして順番に展示を見ていった。東日本大震災・原子力災害伝承館では、その名の通り東日本大震災と原子力災害による被害や、震災後の復興等について広く展示が行われていた。最初の方に訪れた展示では、「安全神話の崩壊～対策を怠った人災」という題で原発事故は想定外であったということが説明されていた。伝言館でお話を聞いていたため、この展示の説明にかなりの違和感を覚えた。再び原発事故が起こった際には、「福島第一原発事故を踏まえ、安全対策には万全を期してきたが、それらを遙かに上回る事故が発生した」と説明するのであろうか。

目に見えないものと人々の関係

人間科学研究科　実践人間科学領域 M1　井上　颯大

今回の 4 泊 5 日の研修の中で私の中に特に印象に残ったのは「目に見えないものと人々の関係」であった。

この研修で印象に残った言葉に「見えない力」がある。この言葉を初めて耳にしたのは初日のみやぎ民話の会の方々とのお話の中であった。民話の会の活動の帰り、加藤さんと小野さんが乗る乗用車の正面から対向車が車線を大きく超えて目の前に現れたそうだ。加藤さんがハンドルを大きくきったことでお二人は事なきを得た。この体験を加藤さんは「何かの力が働いた」と表現された。次にこの言葉が登場したのが多賀城でのトレーラーハウスでの黒川先生のお話だった。トレーラーハウスで保育を行っていたが、新たな保育園の場所を見つけなければならずどうしようもないときに、偶然一軒の空き家を見つけられたそうだ。空き家の隣家に尋ねると持ち主はその隣家の方らしく、しかもちょうど借主を探していたところだったそうだ。黒川先生は「もしあの一軒家が借りられなかったら…見えない力が働いた」と語った。他にも津波に遭いながらも奇跡的に生存された方もおられるなどこの研修では様々な方にお会いし、そして様々な意見や考え、思いに触れた。その中には同じ境遇や経験であっても異なる判断を下した方もおられ、一人ひとり全く異なるひとであることを改めて実感した。そのような中で「目に見えない力」というものが人々の中で共有されていることが非常に興味深く感じた。

また東北の地における目に見えないものというと放射能汚染の脅威があるだろう。今回の研修では福島県を訪問し、震災からこれまでの生活についてお話をうかがった。福島で発生した原発事故では福島の中でもその場に居続ける人、県内でも内陸側に避難する人、県外に避難する人など福島に住む人々を大きく分断していたことを語り手の話を通してしみじみと実感した。それにまだ福島の放射能汚染の問題は解決しているわけではない。楢葉町の伝言館にて半世紀近く反原発運動をされている安斎先生と早川和尚にお会いした。漏れ出た放射性物質は何万年もの時間をかけて影響が弱まっていく。放射性物質で汚染された土地は 10 年ほどでは無くならず、これからもふるさとの未来を奪い続けることを語っていただいた。お二人のお話には事故前から福島原子力発電所のリスクを知っていながら事故を防ぐことができなかった無念や悔しさもあっただろう。早川和尚はその語りの中で涙ぐみながら安斎先生の語りを聞いていらっしゃった。

重ね重ねではあるがこの研修を通して多くの方に出会い、そして多くのお話をうかがった。それは前述のような、共通点もありながら、それぞれの境遇や経験を通して強い思いをもって紡がれたものばかりであったように感じている。この語りを私たちはどうしなければならないのか、語りの証人としての責任とは一体何なのだろうか。この語りを多くの人に広く知ってもらうことが私たちの持つ証人としての責任ではないかと考える。東日本大震災からはや 11 年、震災の記憶は過去の記憶として埋没しつつあるのではないだろうか。震

災の年に生まれた子どもたちは今はもう 11 歳、当時小学 1 年生の子でもはや 18 歳である。日本全体で当時の記憶を持つ人々が減っていく中、しかしこの記憶を風化させてはいけないはずだ。私たちはこの語りを風化させることなく、多くの人にその記憶、小さな物語を継承させることが必要であると私は考える。

フィールドワークでの学び

実践人間科学研究科 M1　宇納恵梨奈

今回参加した９月２日から６日の五日間にかけての宮城・福島でのフィールドワークで、私はテレビのニュースやＳＮＳからでは得られない非常に多くのことを学ぶことができた。震災当時、東日本大震災のニュースは連日流れ、自身が東京出身であったこともあり、私は比較的身近に感じていた。しかしそれは結局、他者から与えられた切り取られた断片に過ぎないのだということ、私自身が身近に感じていた気になっていただけで実際には何も知らなかったのだということを今回のフィールドワークで痛感した。東日本大震災から 11 年と半年という長い時を経て、私はようやく東日本大震災を本当の意味で「見た」のだと思う。私がそう実感できたのは、やはり実際に街に降り立ち、その姿を目で見て耳で聞いたからである。故にこのレポートでは、私自身が街を歩き、見て聞いて得られた学びを述べようと思う。

まずこの五日間のフィールドワークで最も印象に残った体験は、2 日の夜、多賀城のホテルにチェックインした後に行った、多賀城という街を自身の目で見て、多賀城に住む人々の声を聞くためのフィールドワークである。店を探すために街に繰り出した時、私たちＤ班は閑静な住宅街を歩きながら「家とかめっちゃきれいだね」と何気なく口にしながら歩いていた。それから一軒のワイン専門店にお邪魔させていただき、お話を伺うことができた。そこで知ったのは、東日本大震災当時、津波はここまで押し寄せていたという事実である。私はこの時はじめて、地図で津波の被害範囲を学ぶことは決して十分な学びとは言えないのだということを痛感した。お店のご主人はわざわざ外に案内してくださり、津波がどの高さまで押し寄せてきたのかが記されている電柱を私たちに教えてくださった（図 1)。その津波到達線は 172cm ある私の身長よりもはるかに高く、ご主人曰く「多分 2m は越えてたんじゃないかな」とのことだった。自身の身長よりも高い波が押し寄せるさまを想像し、その実際の高さを目の当たりにし、ひどく恐ろしくなった。それと同時に夜だったということもあるのだろうが、私たちのいた地点は海がまったく見えない上、少し坂道を上ったところだったため、こんなところにまで津波が押し寄せていたという事実に私は驚きを隠せなかった。そしてそれと同時にこの近辺の家がどれも新築のように綺麗な理由に合点がいった。貴重なお話を伺いお店へ戻る直前、向かいの居酒屋の店主の方に声をかけられた。その方も缶ビールを片手に当時の津波の話をしてくださり、私たちが恐る恐るこのあたりの家がすべて新しい理由を尋ねれば、「ここら一帯は全部流されたから、新しく建てられた建物ばかりなんだよ」「この辺の店も全部そう」と教えてくださった。その時、私は自身の無知をひどく恥じた。ネットや本で事前に調べ、津波の被害範囲を地図上で把握しただけで満足することの愚かさを知った。それと同時に、実際にその地に足を踏み入れたことでようやくスタート地点に立てたのだと実感することができた。

図 1）津波到達線の記された電柱

次に印象に残ったフィールドワークは、5 日に訪れた双葉町での探索である。私たち D 班は伝承館へ行く道をバスではなく徒歩で向かうことを選んだ。双葉町は同年 8 月 30 日、特定復興再生拠点区域の避難指示区域を解除され、住民の居住が可能な区域へとなった。私はこの実習で双葉町について調べるまで、震災から 11 年経った今でも居住ができない区域があることにすら知らなかった。今回、このようなきっかけを頂かなければ知らないままだったのだろうと思うとゾッとした。それと同時に、普段 twitter や YouTube を見ることの多い私が、いかに限定された情報の中で生きていたのかを改めて感じさせられた。そしてこの街探索でもう一つ吃驚したのは、居住可能区域になったにもかかわらずこの双葉町は人が住めるような環境ではなかったという事実だ。たくさんの蔦に絡まれた家々、雑草が石レンガやコンクリートを割りそのまま真ん中でうっそうと生い茂る道路、医療福祉エリアだったのであろう場所には震災当時の姿のままの病院や介護施設が残されていた（図 2)。そして海に近づけば近づくほど、いまだ通行止めとなり立ち入ることのできない脇道が多くなり、一般人が通ることのできる道は双葉町産業交流センターに続く大通りとその隣の大通りの実質二本だけであったように思う。11 年置き去りにされたまるで廃墟のような街並みがそこにはあった。綺麗に建て直され、機能しているのは駅と市役所のみで、一歩街に踏み出せばまるで人の気配がしないそこはとても「居住可能」な場所とは思えなかった。私はそこではじめて、この街の復興は今やっと始まったのだと知った。この街が本当の意味で生きた街になるのにあとどれだけの年月を要するのか、私には想像もできない。

伝承館からの帰り道、私は班のメンバーのひとりと行きとは別の道を歩いて駅へと戻っ

た。畑が広がっていたのであろう場所には雑草が生い茂り、当時の姿は見る影もなかった。そこにはある植物が道路にはみ出るように生い茂っていた（図３）。すると、同行していた班のメンバーがぽつりと「これ、タデっていって栄養がない土に生える雑草だよ」と呟いた。瞬間、私はこの畑が文字通り死んでしまっているのだと感じた。農家の方々が丹精込めて育て、慈しんだものはあの日、あの一瞬ですべて奪われてしまったのだという事実を目の当たりにし、様々な感情が自身の中に渦巻くのを感じた。

図 2）雑草が石レンガやコンクリートを割り生い茂る道路

図３）畑から道路にはみ出て生い茂るタデ

最終日は、夜ノ森駅を境として立ち入り禁止区域として区切られた住宅街をガイドの方

に案内していただいた。駅は綺麗に整備され、まるでそこだけを切り取れば復興は完全に終わったのだと錯覚をさせるような風景だった。しかしひとたび駅を背に住宅街を見やれば、11 年前の震災当時のまま放置された自販機（図４）や家々が目に入った。元は新興住宅地であったのだというその街は綺麗な家々が点々と建っていた。しかしそのほとんどが雑草や蔦に覆われ、新築の家であるはずなのに廃墟でもあるような異様な雰囲気を放っていた。いまだに持ち主と連絡がつかず放置され泥棒に入られた痕跡の残る家、持ち主と連絡が付き解体された家の跡地に生い茂る雑草。11 年というあまりにも長い年月が作り出したその光景に私はひどく歪さを感じた。ガイドの方の話では、実際にこの駅だけを切り取られ、復興は順調に進んでいるとテレビで報じられたこともあるのだという。こうしたメディアのパフォーマンスによる切り取りが、私のような人々の無知を招いているのだと感じるとともに、与えられる情報だけでは本当に知ったとはいえないのだと改めて感じた。私の両親は、私が被災地実習に行く旨を告げたとき、「まだ支援、いるの？」とそう尋ねた。震災当時、私たちは誰もが自分たちにできることを探していたように思う。募金や寄付、様々な人の関心が被災地に向けられていた。私の両親も例外ではなかった。しかし 11 年という年月は人々の記憶を被災地から遠ざけるには十分すぎる時間だったのだと改めて感じた。私はこの五日間のフィールドワークを経て、両親が私に投げかけた言葉こそが人々の無知と無関心の象徴だったのだと実感した。そして私は幸運にも、実際に宮城と福島という土地に降り立ち、自身の目で見て耳で聞く機会に恵まれた。私は、私自身が見て聞いて感じたことを一人でも多くの人に伝える義務があると強く思うとともに、私たちひとりひとりができることをこれからもずっと模索していく必要があると感じた。

図４）夜ノ森駅の向かいにある自販機

ここまで私が述べてきたフィールドワークで得た学びは、どれも被災地の負の部分とい

えるものとそれに対する自省についてであったように思う。しかし私が今回のフィードバックで得た学びはもちろんそれだけではなかった。私は地域に根付く復興の力、希望が垣間見える場面にも立ち会うことができた。最も記憶に残っているのは多賀城でお話を伺ったワイン専門店に貼られたポスターであった。そこには大きく、「東北のワインで繋がる。」と書かれていた（図５）。店のご主人にお話を伺うと、震災後に始まった活動で、毎年 3 月 11 日の 19 時以降に同じワインの抜栓をするという。そのワインの名前は「Vin de Michinoku（ヴァン・ド・ミチノク）」と言い、東北各地で収穫されたブドウを用いて作られるという。私は被災地応援の様々な形を報道番組や SNS で見てきたが、ワインで繋がるというこのプロジェクトを今回このお店を訪れて初めて知った。このお店のご主人は震災当時のことを語るときは少し口が重くなっているように感じたが、ワインの話になると非常にたくさんのことを楽しそうに話してくださる方だった。自分の好きなもので繋がる復興の形もあるのだとこの時私は実感すると同時に、同じ空の下で日本全国の人々が同じワインを飲むというこれこそが横に広がる糸のように感じられた。そしてたった一本のワインを買うということも、ひとりひとりができる小さなことのひとつであると思う。ひとりひとりができることの形は無限にあるのだと改めて実感した。

また、このワイン専門店でもうひとつ印象に残ったものがある。それはこのワイン専門店のカウンターに飾られた 2 体のぬいぐるみだった（図６）。かわいらしい見た目に惹かれた班のメンバーがお店のご主人に尋ねれば、そのぬいぐるみも復興への願いが込められたものだと教えてくださった。宮城県の東松島市の主婦の方々がプレゼントされたソックモンキーをきっかけに手縫いで作り始めたもので、このソックモンキーの購入者は里親と呼ぶのだと教えていただいた。この時は、色々な復興の形が育まれていたのだなという感動と自分もその一助をしたいという気持ちでいっぱいだった。しかし私が最も吃驚したのはこの翌日の多賀城市文化センターで、昼食をとった時のことだった。昼食をとったセンターのカフェにおのくんが飾られていたのだ。私はこの時、ワイン専門店で感じた横に広がる糸を実際にこの目で見ることができたのだと思う。

図５）ワイン専門店に貼られたポスター

図６）ワイン専門店に飾られたおのくん

今回のプロジェクトで参加させていただいたおおぞら保育園でのお話や漫画トーク、漫画展などを通じて村本先生や団先生をはじめとする様々な方々が 10 年続けてできた縦の糸の力を身に染みて体感することができた。そしてそれと同時に、それらが様々な人々をつなげる横に人がる糸もできているのだと私は感じた。その縦の糸と横の糸で編まれたまるでマフラーのような繋がりを感じることができたことが、今回の私のこのプロジェクトでの大きな学びだと思う。何よりも、東北の方々をはじめとする様々な人々の思いが広げた糸で編まれたマフラーの強固さと暖かさを実感したとともに、私自身もそのマフラーを編む一本の糸になりたいと感じた。確かに廃炉博物館や荒浜小学校、伝承館、街の探索などでは、多くの負の側面を目にし、復興はまだ終わっていないという事実や自身の甘受していた情報の少なさや無知さを体感したこともこの五日間における大きな学びであったと思う。私が施設見学や街の探索で恐怖や悲しみ、悔恨、場の空気を感じたという事実は今後もずっと心に残ると思うし、残し続けたいとも思う。しかしそれと同時に、たった五日間だけで様々な方々の生きる力を目にすることもできた。荒浜小学校の黒板には当時被災

した人々のたくさんの「ありがとう」の文字があった。ワイン専門店のご夫婦はまた東北に来たら遊びに来てほしいと笑って見送ってくださった。夜ノ森駅の人のいなくなった新興住宅地にはそれでももう一度そこで生きようと戻ってきた人がもう一度建てた真新しい家があった。私はこの五日間で目にしたすべてを忘れぬよう、心に留めておくと同時にたくさんの人に伝えたいと思う。そして継続的に私なりにできることを模索し実行し続けていきたいと感じた。

最後にこのような貴重で豊かな学びと成長の機会を与えてくださった村本先生と団先生をはじめ、この実習に携わってくださった先生方に深くお礼申し上げます。そして何より、この五日間交流の機会をくださった宮城・福島の方々をはじめとする東北の方々に心から感謝申し上げます。

「私の 3.11」を考えた

実践人間科学領域 M1 近江涼音

フィールドワークの目的は「私の 3.11」を作ることであった。プロジェクトの最中，「私の 3.11」とは何かを考えていた。何か答えが出ると思っていたが，全く答えは出ず，むしろ渦に入り込んだ。

私は現地でのフィールドワークを終え，自分自身が変化したことに気づいた。何に対しても「この電力はどこから供給されているんだろう」と考えるようになったことである。え，それだけ？そんなこと？と思われるかもしれないが，実感しているのが本当にこの部分なので仕方がない。こう考えるようになったのは，福島でのフィールドワークが終わったあと，東京に行ったことも要因の一つだと考えられる。

福島から東京は，すごいギャップであった。人は多いし，動きは全て速いし，音は大きいし（むしろうるさい…），仙台・福島で過ごした時間と大きく違うことに眩暈がした。この騒がしいところでよく過ごせるものだと思ったりもした（都市のため仕方がないが…）。東京タワーの最上階の展望台からの景色，ディズニーランドのパレード，すべてがまぶしくて，フィールドワークをする前はきっと“綺麗！”と叫んでいただろうが，素直に喜ぶことができなかった。

こう考えると，フィールドワークを行ったことで物事をマイナスにしか見れなくなったのでは？と思い始めた。チカチカと輝く東京の景色，忙しく働く人々，なんでも安くすぐに手に入る社会，なんだか何が正解で，何が恵まれていて，何が幸せかわからなくなった。だがこうやって思考を巡らせることこそ，大切なことであるし，今を生きる人々の役目だと思った。前々から物事を深く考えることはしていきたいと思っていたが，このプロジェクトに参加しフィールドワークをしたことで，さらに考える習慣ができたと感じる。

マイナスにしか見れなくなったという言葉で思い出したことがある。みやぎ民話の会の語りを聞いているときのことである。数名の方が「東日本が悪いものだったのかわからない。これがあったからこうやってみなさんに出会えたのだから。」とおっしゃっていた。東日本大震災は多くの人々の生活を変えて，心も身体も町も大きな被害をおったが，みやぎ民話の会の方はマイナスの面だけではなく，この出来事のプラスの面を見ていらっしゃった。自分の見方を変えるだけで目の前の物事は変わって見えるとよく言うものだが，東日本大震災という大きな大きな出来事も自分の中でプラスの面を見つけていらっしゃった。震災にいい部分なんて無いだろうと世の中の人は思うだろうが，現地の人々はプラスの面を見る強さを持っていた。きっと長い長い年月をかけて，自分の中で整理をされたからであると思うが，私はその強さに心が動いた。また，こうやって被災された方がプラスの面を見ているのに，私たちがマイナスの面ばかりを捉えてはいけないとも思った。

私は政府の言い分と，実際に被災された方の話の食い違いというものを，このフィールドワークの中で少しながら理解した。しかしまだわかりきっていない部分がある。それはき

っと勉強不足の問題であるが，プロジェクトメンバーの一人の「自分は批判してもいい人間なのか」という言葉が思い出された。たしかにそうであると思った。まだ浅い知識しか持っていない私は，何か物事が言える立場なのかと。つまり，何か意見を言うときには十分に他の意見も知っておくべきであるということである。上述した言葉を述べた方は「ほとんど考えたことのなかった人が，後から口を出していいのか」という私とは違った見方であったが，どちらも大切なことであると感じた。自分の意見を言うには普段から考えておくことが必要であるし，周りの見方も知っておかなければならない。

つまり前の段落からまとめると，大切なのは物事のマイナスの面ばかり，プラスの面ばかりを見るのではなく，どちらも見るということである。そして自分の意見を言うときには，賛成・反対のどちらかだが（中立の立場もあるだろう），自分と違う意見も無視せずに聞くことが大切である。せっかく他の人が，自分とは違う見方を教えてくれているのに，真向から間違っているというにはもったいない！

話が大きくそれていた。「私の 3.11」という題であった。つまり要約すると，私はまだまだ「私の 3.11」を考えていくということである。このフィールドワークで自分の変化・成長に気づき，3.11 は他にも多くのことを教えてくれる大きな存在である。「私の 3.11」は続いていく。現段階の「3.11」はあるかもしれないけれど，まだまだ 1 年後，2 年後とどんどん変わっていく。今の「私の 3.11」を表現していくことが大切なのだと感じる。

『特別授業 3.11　君たちはどう生きるか』という本の中の，【歴史】を担当された池澤夏樹さんはこのように述べていた。「世界史は年表ではない。今ここで起こっていることであり，それを踏まえて先に続く道を未知という霧の中で探ることだ。そういう意味で，歴史は生きている。」私はこの表現が印象に残った。まだ 3.11 は生きていて，何も終わっていない。私も 3.11 について，考え続けていきたいと思う。

自分事になる

実践人間科学領域Ｍ１　尾﨑文音

2011 年 3 月 11 日、私は小学 5 年生だった。小学校に登校すると教室はインフルエンザの流行で空席が目立っていた。学級閉鎖が決まり、給食を食べずに嬉々として下校する。家に帰るとテレビがついていて母がいて一緒にお昼ご飯を食べた。母が「なんか気持ち悪いわ。」という。するとニュースに速報が流れる。母「やっぱり揺れたんや。」

その日から私は学級閉鎖で学校に行かなくていい、嬉しい。両親は日中仕事なので、お昼ごはんを食べにおばあちゃんの家に行く。おばあちゃんの家のテレビは DVD が見れない。テレビにはずっと地震のニュースと同じコマーシャル。もう見飽きた。テレビを消す。友だちと遊びに行く。コマーシャルのネタをすると友だちにウケた。

なんの巡り合わせか、2011 年に生まれた命は当時の私と同じ年になっている。移動中のバスでガイドをしてくださった古滝屋の当主里見さんが、院生たちの震災当時の記憶をきいていた。そして、震災を知らない世代が大きくなっていることに気付かされて驚いた。これからどんどん東日本大震災は忘れられていくのかもしれない。私のくだらない記憶であっても東日本大震災と私を繋ぐ記憶には変わりない。

私がプロジェクトに参加した目的は主に二つある。一つ目は「被災地において芸術や表現活動がどのような役割を果たしているのかみてみたい。」二つ目は「今まで他人事であった東日本大震災を自分事として捉えたい。」今回は主に後者について述べたいと思う。

私は高校生まで感動ものの映画をみても涙を流したことがなかった。現在、私は役者をしている。色んな役をして、悲しい気持ちになっても思うように涙は出ない。決して涙がすべてだとは思っていない。しかし、リアルの自分のことであれば嫌でも大号泣する。その度に私は結局自分のことでないと必死にはなれないのかと思い知り、悲しくなる。

実習中に東北でたくさんの人と出会い、それぞれの 2011 年 3 月 11 日を見聞きした。「見る」というのは話を聞く以外にもアート・フェスティバルに参加し芸術作品から、現地の店に掲示されている写真から、行方不明になった娘さんの遺骨が見つかった場所のイミテーションから、知ることがあったからだ。私が学級閉鎖を喜んでいた日に、同じ日本で辛い思いをしていた当事者たちとはじめて出会った。直接向き合って入ってくる生きた情報はエネルギーを持っており、自然と自分の鼓動が早くなるのを感じたり、目頭が熱くなったり、自分の大切な人たちの顔が浮かんできたりした。そして、彼ら彼女らは「感謝」の言葉をよく口にする。その「感謝」を受けることが辛く感じた。私は東日本大震災があった時、現地について知ろうともせずに日常生活を送っていたし、その後も大阪という安全圏で電気を浴びる様に使いながら生活しているからだ。

東北の実習終わりに私は友人と福島の山奥で一泊した。夜、コンビニへ向かうため車を走らす。しかし街灯はひとつもなく辺り一面真っ暗だ。その非日常感にワクワクしながらも少

し怖さがあった。自然と「さんぽ」を口ずさむ。おおぞら保育園の黒川園長先生が子どもたちと避難するにあたり「さんぽ」をみんなで歌ったというエピソードが記憶に新しかったからだろう。「さんぽ」は私を楽しい気持ちにさせた。あの日の先生や子どもたちもこんな気持ちだったのかもしれない。少し彼女たちに近づけた気がした。私はきっとこの先も「さんぽ」を聞くと今回の実習のことを思い出すのだろう。

大阪に帰って映画「アバター」のリバイバル上映をみた。「アバター」は遠く地球から離れた惑星が舞台で、莫大な利益をもたらす鉱物を得るために先住民の命と暮らしを脅かす地球人たちが登場する。きっと多くの人はこの地球人に嫌悪感を抱くだろう。しかし自分たちも福島県の人たちに同じことをしてしまったということに気が付いているのだろうか。

さらに少し前に鳥取砂丘に行ったことを思い出した。広い砂丘では遠くに小さくみえる人々を「なんだか蟻の行列みたいだな。」と思った。きっと原爆を落とした人もこんな感じに人が蟻のように見えていたのだろうと思ったりした。これまで私は東北の人の顔を見ることがなかった。しかし今回たくさんの東北の方々と出会い、顔を見て話を聞き、大きく感情を揺さぶられた。今の私には東北の人々を想像すると出てくる顔や話がある。そして、ほんの小さな変化だが、つけっぱなしの電気をこまめに消すようになった。「自分事になる」とはこういうことなのだろうか。

印象的だったのが、被災した本人たちでさえ当時を忘れてしまいそうになるということだ。そう語ってくれた方は毎年のプロジェクトの際に院生たちに当時を語ることで自分も思い出しリセットしているのだという。きっと大きく揺さぶられた私の感情も大阪で生活している内に忘れてしまうのだろう。この文章は私の活動を知らせる報告の意味もあり、自らが忘れそうになった時に思い出す役割を担うものになると信じている。

最後に、貴重な機会を与えてくださった村本先生をはじめとする先生方、私たちと関わってくださった東北の方々、そしてこの拙い文章を読んでくださった方に心より感謝申し上げます。

東北を訪れて

心理学領域 M1　齋藤優希

わたしが東北を訪れて、まず初めに持った感想は「きれいな街だ」ということでした。飛行機から電車に乗り換え仙台へ着くと、お店には人がいっぱいで、せっかく食べようと思っていた牛タンを時間の関係で食べ逃すほどでした。それは、事前学習で調べたイメージとは違いました。電車の中に津波が来た時の対処が表示されていること以外、震災の影響は何も感じられなかったのです。

宮城についてまず、私たちは石巻リボーンアート・フェスティバルへ向かいました。仙台では牛タンを食べ損ねたので、お昼ごはんに石巻焼きそばを食べました。素朴で優しくて非常に美味しかったです。リボーンアート・フェスティバルとは宮城県の石巻を主な舞台とした「アート」「音楽」「食」の総合芸術祭です。公式サイトを確認すると、「2011 年 3 月 11 日の東日本大震災では甚大な被害を受け、津波犠牲者最多の市区町村となりましたが、復興しつつある様子を見ることができるでしょう。」と書かれています。その言葉の通り、街を歩いていると震災後 11 年とは思えないようなきれいな街並みが並んでいました。

その後、石巻の街を透明なバスに乗ってまわるという体験もしました。マンションや家などがあり、道路も舗装されきれいな街並みがあり、その向こう側の堤防からかすかに海が見えました。ふと遠くを見ると、その新しい街並みの中に震災遺構の学校がありました。さらに、震災後に植えられた木々はまだ若々しくここは確かに 11 年前津波があったところであるのだと感じました。

次の日、多賀城でのフィールドワークがありました。おおぞら保育園で震災の体験を聞かせていただき、その後多賀城の街を歩きました。震災当時の写真と現在の様子を見比べさせてもらったり、今なお残る津波が去った水のあとを見たりしました。地元の高校生たちが作成した津波到達点の表示を確認するとほんの少しの距離の差で津波の高さが全然違うことを感じました。また、津波から逃げた人がどのような経験したのかを聞かせていただきました。歩道橋の上に逃げた人は寒い一夜を過ごしたこと、津波から逃げられてもコンテナの上で助からなかった人もいたこと、2 度流されて助かった人がいたことなど、一人一人の震災の体験は異なり、防災というのはただ逃げればいいというだけではなく体験を聞き活かすことが必要なのだと思いました。多賀城にある「末の松山」には約 1000 年前からの伝承があります。私は「契りきな　かたみに袖をしぼりつつ末（すゑ）の松山波越さじとは」という和歌が好きでしたが、津波も末の松山は超えないという言い伝えがあったということは知らず、語りを受け取ることもまた大切なことだと思いました。以上のように、現地に行って話を聞くことで新たなイメージを得ることができ、調べ学習だけでは触れられなかった語りに触れることが出来るのだと感じました。

それから多賀城を出発し、ふくしまへ。宮城で震災のあとを感じながらも、少しずつ復興は完了に向かって進んでいるのだと感じた思いは打ち砕かれました。ふくしまは原発があり、まだ戻れない地域もあるところです。宮城のときの感想に抱いた思いと同じくふくしまの街もきれいでしたが、ぴかぴかの駅にはほとんど人がいませんでした。11 年たってようやく制限が解除される予定の地域にも足を運ばせていただきましたが、街は閑散としていました。様々な人にお話を聞かせていただいたり、施設を見学させていただいたりして、復興にはまだまだ時間がかかる、生きている間に故郷にもどれない人もいるということを知りました。そして原発事故によって人が離れた地域に新たな生態系ができているということ、そこに堤防の工事のために人の手が入りそうなことや、畑を諦めた土地に 30 年後ゴミになるような太陽光発電がおかれていることも教えてくださりました。ふくしまをめぐっては、いろいろな立場や経験によってさまざまな思いがあることを感じました。事前学習のなかでは大きな物語ばかりにアクセスして、小さな「語り」を聞くことができていなかったのだと気が付きました。

この実習をとおして、私の考えは二転三転しました。事前学習では、復興はまだ終わっていない。東北に降り立った時の感想は、復興はほぼ終わっている。しばらくその空気を吸って過ごしたあとでは、確かに進んでいるけれどまだ全然終わっていないのではないか。ということでした。そしてそれがいつ終わるのか、果たして終わりはあるのかということはとてもわからないと思いました。

しかしながら、今回のように自分だけですべてを決めないフィールドワークの機会を得られて、視野はぐっとひろがり、1 人では得られない体験ができました。今回のフィールドワークが行えたこと、関係者の皆様に感謝したいです。このような機会が得られたことを無駄にせず、授業前はほぼ無関心だった東北に対して、少しでも関り続ける姿勢を保ち続けたいと思います。ちなみに食べ物が魅力的だったため、私は東北に行く前と後では 4 キロ増量しました。東北の街が好きになって大阪へ帰りました。大きなことは私一人ではできないかもしれませんが、東北の魅力を伝えるその一人になりたいと思います。おこがましいかもしれませんが、それが東北の力になると信じて。

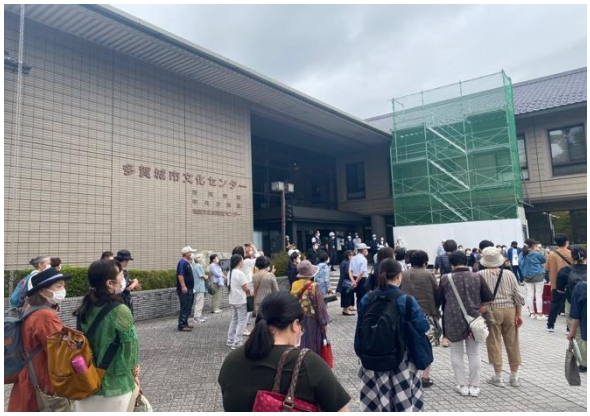
忘れられない夏

実践人間科学領域Ｍ１　曽　佳荷（ソ　カカ）

2022 年 9 月 2 日～6 日、立命館大学人間科学研究科・「東日本大震災支援プロジェクト」の一員として参加させていただきました。東北でフィールドノートを書きながら歩きました。仙台市始点として、多賀城市、白河市、いわき市を回り、最終日は双葉郡にも足を延ばしました。大阪に戻って来た時、もう福島から離れたと感じたその瞬間、何が心に残っているのか振り返ってみると、舌に尽くしがたい感情が胸にいっぱいありました。仙台駅の栄華、静かな多賀城駅、特別感がある白河駅、それから双葉駅の風景などを思い出し、綺麗な町の裏にあるのを見えるようになっています。福島で過ごされたこの夏は一生にも忘れられない夏だろうと思っています。

初日、民話の話は印象的でした。民話を大切にしている方々がいるからこそ、しっかりした形（本など）で保存できました。元々日々忘れやすいものですが、重要である伝承のお陰様で生々しく私たちの前に舞い踊っていると考えます。震災の話もそうだと思います。東日本大震災は言葉にならない惨めな経験ですが、後代に伝える必要があります。民話は記録しないと残らないものですが、東日本大震災も聞く方がなければ、いつの間に消えるでしょうか。このプログラムを持続し、民話のように 3・11 に関するものもできる限り残れるのではないかと考えています。そして、自分がその中で証人としていることが責任を感じながら多くの方々に伝えていきたいと思っています。

母国の学校は毎年避難訓練を行なっていますが、全ては火事訓練です。日本に来て、5 年になります。この中で学校でも職場でも地震に関する避難訓練を受けましたが、多賀城市文化センターで体験されたのが一番本格的でした。コンサートを聴きながら、地震があったという設定は実のような感じがしました。私にとって 2018 年大阪があった地震は衝撃的な記憶でした。異国で初めて地震経験のため、不安を抱えて避難所へ行きましたが、そこで見たのは卓球に楽しんでいる日本人でした。それをきっかけにもし本当に大きな地震があれば、どうやって生きていくのかと考え始めました。今回もお聞きになったように災害の前にまず自分自身の命を守ることですが、その後は生き残った方々の協力しながら励ましていくことです。



我々留学生は日本が地震の国だと知っている上にきたはずですが、地震があったら、どうやって乗り越えるのかという考えがあまりないそうです。なぜなら、自分に当たらないでしょうという思い込みが強いからです。日本語学科の卒業研究発表で私は「私たち留学生の地域社会での取り組み」という研究テーマで発表しました。その際、積極的に周りの日本人あるいは住民たちと良好な関係を作ったり、地域活動に参加したり、留学生に呼びかけたりしました。いざという時に手を繋いで助け合いとお願い申し上げました。卒業して一人暮らしになって市役所など地域と接するのは住民票ぐらいしかありませんでした。慚愧に堪えませんでした。

震災の中で、おおぞら保育園の園長さんは子供にきれいな世界を見せたくて、周りは災害のままですが、安心できる世界を作った話に感銘を受けました。子供時代は一番幸せだとよく言われていますが、災害では生き残るのも精一杯です。子供のため、童話世界を作るなんて工夫する余裕がないでしょうか。実現したのは園長さんその初心を持ち努力の姿は神様にも感動したと思いました。彼女は「一生懸命頑張れば力をもらいます。」と話していました。この一言で刺激を受けました。今でも耳に残っています。一生懸命は自分のためだけではなくて、他人事でも頑張れば力を得ると感じました。

今回のプロジェクトに参加したことで過去の記憶を呼び起こすようになりました。日常生活で煩わしいことの中の人間は忘れていくものですが、このプロジェクトで出会った毎年リセットし、語ってくれた方々は信念を持ちながら持続する姿は私の光になっています。これからは日々を感謝し、教えてくださった教訓を忘れずに生きていきたいと思っています。

最後に、貴重な機会を与えてくださった村本先生をはじめとする先生方、今回の実習でよくしてくださった現地の方々、このプロジェクトのため長年にわたって頑張っている方々、私たちの先輩、これからこの支援プロジェクトに関心を持っていらっしゃる後輩に心を込めて感謝のお礼を申し上げます。ありがとうございます。
そして、この拙文を読んでくださった方に心より感謝申し上げます。

宮城・福島での学び

臨床心理学領域 M1　西川史夏

宮城での学び

震災により傷ついた人がいること、震災が当たり前の日常を奪うこと、それは現地に行く前からある程度は想像できているつもりだった。だが、実際に震災を経験した人から聞く語りは、震災が起こった時の感覚、津波が来た時の光景、避難所での生活など段階的に場面ごとに語られ、メディアで触れる震災の話や私の想像の中では補いきれないものがあった。

「それぞれが自分の命を守るため災害時は逃げるのを恥ずかしいことだと思わずに逃げる重要性」や「避難所で、避難者側にも頼んで協力してもらうことで支援者の力にもなるし、避難所の団結力が生まれること」など、震災時の生き延び方を多く教えてもらうことになった。震災を経験した人は、私が知らないこと、分からないことを多く知っている人だと思った。また、その経験を語り継ぐことを継続してくれている方に対する感謝や敬意の気持ちを持った。今回学んだことを生かして震災に備え、家族や友人にも伝えていきたいと思った。

また、おおぞら保育園の園長さんが園児といつもお散歩の時に歌っている「さんぽ」を歌いながら津波から避難してきたというエピソードが印象に残っている。子どもたちの恐怖は大人たちの反応によって作られているところがあると感じた。子供に不安な顔を見せないこと、子供に明るい現実を作ってあげることは災害時の子供の心を救うことになると思った。

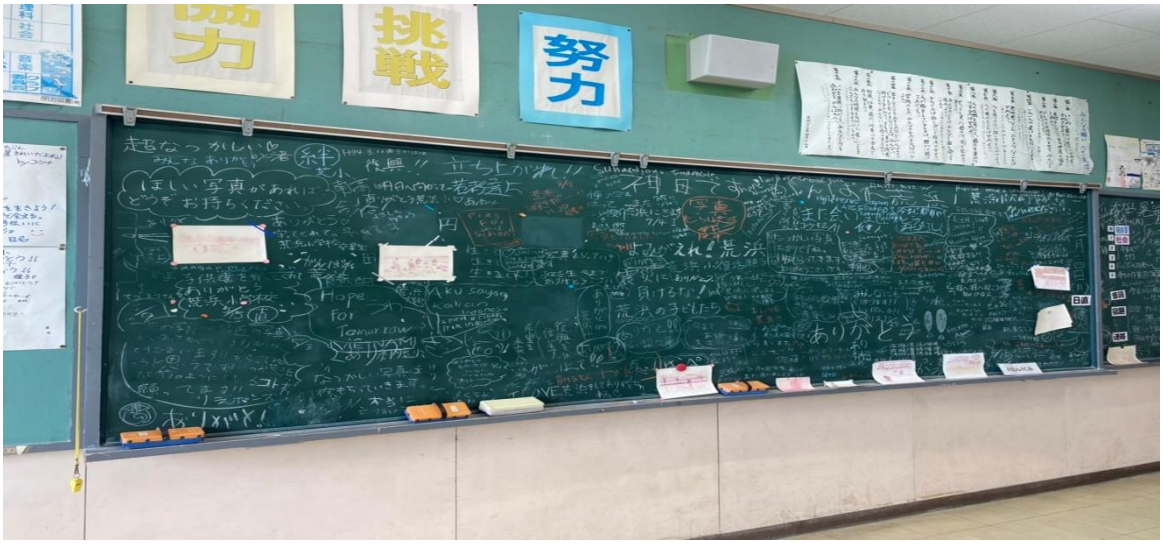
「被災者も震災を忘れる。」ということも聞いた。忘れてしまうのは私たちだけではない。被災を経験した人がずっと震災の記憶の中にいるわけではなく、これから目の前の現実と付き合い生きていかなければならないこと、そして、震災から時が経てば当たり前の日常を生きることができるようになっているという人間の回復力を実感した。それはある種人間のレジリエンスの強さだと思った。

9 月 2 日に訪れた荒浜小学校にあった震災を経験した人の文章では、「亡くなった家族の顔を見にいくために番号待ちをし、長い待ち時間の末会いに行ったら大量の死体と共に家族が並んでいた。」という体験が書かれていた。生きたかった家族の気持ちと残された人の気持ち、そこに書かれた文章だけで辛くなり続きが読めなくなるほど苦しくなった。「本当に経験していない人に気持ちが分かるのか。」と思っていたし、実際に知らない誰かのエピソードだったのは確かだが、現地で現地の声に触れる重みを文章から感じた。

荒浜小学校の黒板には、みんなでみんなを勇気づけあうメッセージが書かれていた。生き残った人たちは、悲しみに浸りながらも生活のことを考えていかなければならない。そうやって前を向いて、当たり前の生活をまた戻してきた人たちの力強さに敬意の気持ちを持った。震災を経験した人がいつまでも同じ場所に留まっているわけではない。私たちは震災を経験し、震災に対して多くの知識を持つ人たちの復興過程を学び、知ることで震災の被害を少なくし、震災時に生き延びる術を身につけることが可能だと思った。

一方で、当たり前の生活を送っているように見えても震災による傷や困りごと、不安を抱えている人たちがいることを自覚し、震災が忘れさられてしまい災害の消費へと向かっていってしまうことを見過ごしてはならないということも学んできた。宮城にて「あの日を忘れない」「絆を流行りで終わらせないで」と言った言葉を何度も見聞きした。現地の人が持つ、「忘れたくない」、「忘れないで欲しい」という気持ちを大切にしたいと思った。そして震災を経験した人たちは、大きなエネルギーで震災を乗り越え、震災を知らない私よりもはるかにどう震災を生き抜くかの知恵を持ち、助け合うことの力を知っている人たちなのだと思った。

荒浜小学校



荒浜小学校の黒板

福島での学び

今回のプロジェクトの最中に食べた双葉丼や名物の桃や梨やおいしい魚、豊かな自然、気さくに話しかけてくれる人々に触れあい福島の魅力を感じる一方で、そこで暮らす人々の

当たり前の生活が原子力発電所の事故により奪われたことについて辛くやるせない気持ちになった。「震災や津波は災害であっても、原子力発電所の事故は人災でありこの両者は異なる」と説明してくれた F スタディツアーのガイドさんの言葉のように、天災は予期することができないが、人災は防ぐことができると思った。

伝承館までの道、双葉町を歩いていたら、双葉町を元気づけるアートが所々見られた。倒れかかっている電信柱やひび割れた道路、崩れた瓦や、窓が歪んだ家、車椅子がひっくり返ったままの老人ホーム、震災の後そのままになっている街を目撃して暗い気持ちになりそうな時に目の前に現れるアートは私を鼓舞してくれた。ただ、街で歩いている現地の人らしき人は工事している人以外見かけることはなかった。車はちらほら走っているが、とても人が住めるような街では無いのだと思った。

途中、見かけた空間放射線量の値が伝承館に近づくにつれて高くなっていた。双葉駅で表示されていた値と比較して途中かなり高くなっていたことに動揺した。プロジェクトに参加する際に放射線を浴びることを怖がっていなかったのだが、目の前に出される数字を見て漠然とした不安がやってきた。飛行機やレントゲンなど、よく言われる放射線を浴びる場面の放射量と比較してみたり、体に害を与えるとされている放射線量を調べたり、歩きながら不安を解消するための情報を集めている自分がいた。しかし、自分にとって今この時間受けている放射線量が無害なのか否かよく分からないままであった。

原発事故の現場の近くに住むということは、この完全に解消されることはない不安感と付き合い続けることになるのだと思う。私はもう大阪に帰ってきているため、あの場所にいたのも短時間であったが、それのみで不安になっているのだから福島の人たちが事故から感じている不安感がどれだけ高かったか考えると辛い気持ちになった。また、私は自主的にプロジェクトに参加してあの場にいたが、現地にいた人は今まで自分たちが暮らしていた場所が自分の判断には追いつかない程危険な場所になってしまったのだ。その人たちが感じている理不尽さや不安、怒りの気持ちを考えると悲しい気持ちになった。

白河で聞いたお話では、子どもたちに定期的に甲状腺の検査が行われており、その結果が入った封筒をこれからも親が開け続けることになるということであった。誰にどれだけ被害があるかも体質や健康状態によって異なる。「自分に害がどれだけあるのか分からない」、そして、「今出ている情報が変わり、基準が変わり、何を信じ続ければいいのか分からない」、そういった恐怖や不安感と長く付き合っている人たちがいることを原子力発電に頼っている人たちは皆知るべきだと思った。

双葉駅から伝承館までの道で見た道路とアート

双葉丼

白河で食べた桃ジュースとシフォンケーキ

『東日本・家族応援プロジェクト+（プラス）2022 に参加して』

実践人間科学領域Ｍ１　森川佳恵

はじめに

私は、東日本・家族応援プロジェクトで宮城・福島を訪れた。限られた日程の中で、様々な場所を訪れたくさんの方々にお話を聞かせていただいた。各地で被災体験や当時のその土地の状況を伺う中で、「東日本大震災という災害は、世界でも未曾有の大災害である」ということを感じられずにはいられないと思うようになった。東日本大震災は、大地震によって引き起こされた大津波、そして、それだけではなくその大津波によって引き起こされた原子力発電所の大事故といった、複合災害であることを改めて考えた。特に福島は、このことを強くそして深く考えさせられた土地でもあった。「視覚では捉えにくい」特性のある放射能汚染が広がった地域であり、福島で暮らす人々の日常生活様式や思考、言語、認知の隅々まで入り込み、行動変容を促したことが分かった。そして、今もなお、子供たちの健康を脅かしている事実やその保護者の深刻な思いを知り、これからもまだまだ続いていく大きな苦難の中で、必死に毎日を生き抜いておられる現地の方々から多くの事を学ばせていただいた。

以下に、現地でのフィールドワークの概略と学びについて報告する。

2022.9.2　仙台市黒松市民センター

みやぎ民話の会交流会

初日は、みやぎ民話の会の方々の交流会に参加させていただいた。私は、民話とは、昔話のようなものだと思い込んでいたが、そうではなく、今ここで起きていること、そして、やがて語り伝えられるべき大切な「民」の「話」となるべきものも含めて、みやぎ民話の会ではそう位置付けているとのことだった。民話採訪者の小野和子氏によると、東日本大震災後に出会った被災者の方から、「形あるものはすべて流されたけど、私には民話が残っていました。」という声を聞いて、その年の夏に民話の学校を開催され、当日は 200 名の参加があったとのことであった。民話を語ってもらい聞く、そのやり取りは常に真剣勝負で、それを言葉にせずとも全身全霊で理解し語り手と向き合ってきたということであった。また、震災後、故郷の双葉町から 7 度も避難生活を強いられたという目黒とみ子氏のお話は、とても印象に残った。みやぎ民話の会との出会いは避難先の老人ホームで必要に迫られて話した、双葉町に伝わる昔話がきっかけだったということであった。思いがけなく好評であったことで、民話の力を思わずにはいられないと熱く語っておられた。故郷を追われながら、なおも新しいことに挑戦して生きていこうとされている目黒氏の表情は、とてもはつらつとしておられた。それから、加藤氏は、子供たちにもわかりやすいような面白い民話を提供し、活動を通して喜んでもらっているとおっしゃっていた。このことから、老若男女、時代が移り変わっても民話を大切にしていくことで、人と人が繋がっていくのだと感じた。

2022.9.3　多賀城市　おおぞら保育園旧園舎のトレーラーハウス

多賀城実行委員会の方との懇談会

２日目はおおぞら保育園旧園舎のトレーラーハウスにて、多賀城実行委員会の丸山氏、おおぞら保育園の黒川園長に震災当時のお話を聞いた。

丸山氏は、自宅も被災にあい被災者でありながら同時に行政側の立場でもある中で、避難所生活されている方々のお世話係としての対応も経験されていた。避難所生活は、狭い空間でこの先の見えない不安の中で集団生活を長期間強いられるということになる。そのため、ストレスは蓄積しそれによって多くの様々なトラブルが起こったとのことで、ご苦労されながらも丁寧に対応されて乗り越えてこられたことを知った。丸山氏のお話の中でも一番印象に残った言葉がある。それは、「東日本震災は建物の倒壊は少なかった。津波は逃げれば助けられた、助かった。逃げることは勇気のいることだが、同時に命を守る事であり災害時にはそれが一番大切であることを忘れてはいけない。」という言葉だ。人は、過去経験したことのない出来事が突然身の回りに降りかかったとき、その周囲に存在する多数の人の行動に左右されてしまう。日常生活では協調性が必要でも、災害時には周囲の様子をうかがっているうちに避難が遅れる原因にもなりかねない。こういった同調性バイアスが避難の妨げになっているということなのだと思った。

また、黒川園長は、避難直前に持ち出したおやつやお茶などが、その後の長時間の避難中の園児たちに役立ち、夜は乳児を抱いて体温で温めて眠ったとのことだった。また、黒川園長は、「亡くなった方々は、まさか自分は亡くなるなんて思ってもみなかったことだろうという思いがあると思う。」と言いながら、涙が溢れていた。被災された方々は、命を落とした人の思いを感じながら生きておられ、一日一日を大切に丁寧に過ごされていると感じた。また、多くの方から支援を受けたという感謝の思いとその土地の力に生かされたという思いがとても強く、私たちにできることはそういった被災者の方々の体験を語り継いでいくことなのだと、この日も証人としての役割の大切さを学んだ。そして、最後に、鵜野先生がおっしゃっていた、「今日のここでの出会いもそうであるように、生きていくことは、偶然の連発である。」というこの言葉は、私にとって心に刺さった言葉であった。生きているということを、当たり前に感じるのではなく、様々な土地で様々な人との出会いによって偶然が重なってきた経過であると考えると、私も毎日の生活に感謝して過ごしていかなければならないと改めて感じた大変貴重な時間になった。

東北歴史博物館

午後からは、私たちのグループは東北歴史博物館にフィールドワークに行った。この日は、「欲望の昭和～戦後の日本と若者たち～」という夏季特別展が開催されていた。戦後の日本人が「豊かな人並みの暮らし実現」という欲望を募らせながら、高度経済成長と共に発展させてきた経過を、当時の若者に流行したものなどによって展示されていた。欲望の実現としての「消費」の意味で、生活必需品の「買い物」に加え、「自分らしさの実現」、更にはレ

ジャーとしてのショッピングなど、様々に拡張変化した過程が分かるように、進化していく電化製品やそれにまつわるレコードや雑誌などが展示されていた。そして、この特別展の中でも、私が一番印象深かったものは、「三種の神器（冷蔵庫・白黒テレビ・洗濯機）」である。それは、戦後復興修了をたどり世の中が豊かになりつつある中で、経済的な潤いと勢いを象徴しているようにその時は感じたからである。しかし、博物館を出て帰りのタクシーを待っている時にふと、ここは東日本大震災が起きた場所であり、同時に原子力発電所の爆発事故が起きた場所でもあることを思い出し、複雑な心境になった。日本が少しずつ豊かになり、こうした電化製品が各家庭に出回り、電気を不自由なく使える時代が来たのも原子力発電所ができたことによるものなのだと改めて考えた。知らないということは、罪であるというように思い、もっと原子力発電所について学ばなければと考え、残された日程の中でのフィールドワークに力を入れようと思いながら次の日の訪問地、白河市に移動した。

2022.9.4　白河市

白河小峰城跡

3 日目は、白河市立図書館にて午前中のプロジェクトの準備の後、私たちのグループは、図書館傍の東北本線ＪＲ白河駅の裏手に位置する白河小峰城跡へフィールドワークを行った。ガイドの方に声をかけると快く丁寧に約 30 分程度、城の成り立ちや歴史を説明してもらいながら城の周囲をゆっくり歩いた。小峰城は、東北地方では珍しい総石垣作りの城で、盛岡城、若松城と共に「東北三名城」の一つにも数えられている。戊辰戦争でほとんどの建物が消失し、城址には石垣が残るのみとなっていたが、1991 年に本丸御山階櫓が木造により復元された。2010 年に国の史跡に指定されたが、2011 年の東日本大震災により、石垣が 10 か所にわたって崩落した。しかし、約 5 年をかけて崩落した石を一つ一つ番号を振り丁寧に文化財として調査を行い、崩落前の写真や資料を参考に、一つ一つ元にあった位置に戻していったとのことだった。まるでパズルをくみ上げていくような細かい大変な作業であったそうだが、観光客が SNS で投稿した写真なども手がかりになったと話されていた。半同心円型落とし積み石垣といって、隙間なく綺麗に積み上げられた石垣は、溶結凝灰岩をあらかじめ加工してできており東北でもここまで立派なものはないそうである。東日本大震災における文化財の被害としては最大のものとなった小峰城跡であるが、このように、修復が可能になったのも白河市が以前から史跡認定に向けて準備していたことと、当時の市長の土地を思う熱意が偶然合致し土地の歴史を守り形になったのだと思った。ここでもその土地を大切に思う人々の思いの強さに圧倒された。

白河市立図書館（りぶらん）においてプログラム

ふくしま子ども支援センター、NPO 法人ビーンズふくしま母子サポートネット、コミュニティカフェ EMANON 交流会

午後からは、プロジェクト関係者との交流会に参加した。ふくしま子ども支援センターの

小磯氏は、自身は東京出身であり震災後に東京に避難する選択肢もあったにもかかわらず、福島にとどまる選択をして子育てをした苦悩を涙ながらに語られたのが印象的であった。それもこの土地が好きだからということであった。当時子供は 10 代で成長期の大事な時期であり、食べ物の放射線量を気にしながら県外の食材を使用し、一つ一つ安心できることを模索していきながら過ごしてきたとのことであった。また、NPO 法人ビーンズふくしま母子サポートネットの三浦氏は、「福島の子供たちは 2 年毎に甲状腺検査を受けており、この検査結果を後日郵送で受け取る際に、毎回、開封するときにもしも悪い結果であったらどうしようという強い不安がよぎる。これが一生付きまとうんですよ。」とおっしゃっていた。子供と共にその保護者も不安を抱えたまま、子供の成長を見守っていかなくてはならないことと考えると、同じ子を持つ保護者として、私は、いたたまれなくなった。そして、コミュニティカフェ EMANON 交流会では、地元の白河の高校生を大切にしており、地域と若者をつないでいる活動に興味を持った。まずはやってみるという精神を養い、そこから他者との出会いに繋がり、ボランティアなどの活動を通して自分の生き方を考える機会となってほしいというコンセプトも素晴らしいと思った。私も将来このような活動に参加してみたいと思うようになった。その後、翌日の訪問先のいわき市へと移動した。

2022.9.5　楢葉町

ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館

4 日目は、JR 常磐線湯本駅から竜田駅へ向かい、そこからタクシーで 10 分ほど山の方に向かって細い道を進んだところにある、宝鏡寺という 600 年以上の歴史のある古いお寺を訪問させていただいた。その敷地内に、早川住職によって 2021 年 3 月に設立された木造の温かみのある伝言館があった。館内には、原子力発電所の事故関係の資料や、過去の核兵器による戦争や被害の資料があふれていた。人類にとって原子力発電というものは、ひとたび事故を起こすといかに危険なものなのか、早川住職は、長年にわたり核の被害を繰り返さないためにメッセージを発信し続けておられた。早川住職の語りを聞いていると、80 歳を過ぎて尚も精力的に活動されている熱い思いが伝わってきた。私は、ここを訪れるまで、これほど身近に原子力発電所があることが危険なものとは、感じていなかったことに気づかされた。事前学習で、日本に原子力発電所が 54 基も増えた背景があることは把握していたが、地震大国でもある日本は近年、毎年のように各地で大きな地震や大雨などでの洪水など大災害が頻発しているため、それが、東日本以外の原子力発電所で起こるかもしれないと考えた時に、この地を訪れてみて改めて自分の事のように考えるようになった。関西でも同じことが起こる可能性はあるかもしれないと。無知であった自分を恥じた。産業水準と人口密度の低い地域が弱い立場にさらされ、国や電力会社や地方自治体、財界人や政治家までもが金銭と密接に絡み合い、当時の国民に「原子力＝安全」と刷り込みで出来上がった結果が、このような悲惨な結末を迎えたことに心が痛む。そして、早川住職は、反原発活動の傍ら障害者支援にも力を注がれてきた方であり、福島第一原子力発電所の事故の翌日に、身寄りのな

い障害者を伴っていわき市へ避難されたということが、当日配布していただいた資料の中に記載してあった。私はこのことについても自分なりに考えてみた。身寄りがなく大災害に遭遇し大きなトラウマを抱えた障害のある方にとって、その後の人生にとても大きく影響していっただろうと想像した。慣れない知らない土地への避難生活が、病状へも影響し不安定になっていくことも考えられる。私は医療従事者として、環境変化に敏感で脆弱な障害者の方へ寄り添ってこられた早川住職の思いに共感した。伝言館では、「今回の事故後の福島の復興は10万年も先」という安斎先生の言葉が最後に胸に刺さった。私たちができること、それは、ここで、目で見たこと、聴いたこと、感じたことをありのままに身近の人へ伝えていくことだと考えた。忘れない、伝え続けていく、これが証人となる事ではないかと考えた。

震災遺構浪江町立請戸小学校

午後からは、まず、請戸小学校を訪ねた。ここは、1873 年に創立され建て替えや改称を経ながら長年にわたって地域に愛されてきた小学校である。東日本大震災によって甚大な被害を受けたが、当時通っていた児童 93 名は奇跡的に全員無事避難することができたそうだ。教職員の迅速な判断と児童の協力という連携がうまくできた結果である。そして、管理棟入り口を入ってすぐのところに、「福島民友」という地元紙の記事が展示されていた。校長室の耐火性の金庫から、郷土史など原本が 20 数冊発見されたとのことでこれらを専門家で今後の活用方法を検討することが報じられていた。また、見学ルートを順路の通り進んでいくと、体育館、調理場、放送室など大きさや残骸から想像できる部屋が続いていた。展示されている写真には、被災前の当時の楽しそうな学校での活動風景が映し出されており、目の前の光景とのギャップが何とも言えぬ感情を沸き起こさせた。

東日本大震災・原子力災害伝承館

午後からはもう一か所、原子力災害伝承館を訪ねた。ここは、2020 年 9 月 20 日、事故の起こった福島第一原子力発電所からわずか 3kmの距離に設立された施設である。2020 年 3 月、常磐線が全線再開となり新たに橋上駅舎となった最寄り駅の双葉駅からシャトルバスが出ている。バスに乗車し車窓からみた街の風景は、帰還困難区域の一部が 8 月 30 日に避難指示解除となっているが、10 年経過しているにも関わらず、駅前というのに人通りもまばらで店も少なく沿岸部に向かうにしたがって徐々に建物が減り、殺風景な印象であった。除染後の解体や被災で流された民家もあるのか更地が目立ち、生活感もなく、まさに時が止まったゴーストタウンのようだった。見かける人といえば、周辺の復興事業に従事していると思われる体格の良い作業員風の複数の男性たちか、私たちのように震災遺構をめぐる観光客ぐらいではないかと思われるほどであった。しかし、伝承館に到着しまず感じたことは、創設されてまだ間もないので当然だが、真新しく、そして、近代的なデザインの建物ということもあり建物だけを見ると、復興の進展をやけに象徴しているかにとれるということだった。また、館内には順路の所々に、座って休めるベンチ型のゆったりとした休憩スペース

が設けてあり、展示物を見学中に当時の記憶を思い出し気分不良を訴える見学者があらわれる可能性も視野に入れて、見学者の心理的身体的配慮も含めた設計になっているではないかと感じた。それから、展示に関しては、私は、福島県の空間線量率の推移や、子供を持つ保護者の放射線に対する意識変化の調査などが目に留まった。人体に危険な数値から現在は健康被害に影響のないレベルであることを強調し、いかにも改善されているかのような展示がモデルや図を使用して展示されていた。いずれも、10 年経過して復興は順調に進んでいると言わんばかりに思えた。これに加え、外部被ばく線量把握の目的で使用されたガラスバッジ型の個人積算線量計も、実際に子供たちが身に着けている写真と共に展示されてあった。国や東京電力は、ここまで、震災後の健康に関して経過措置を十分実施しているかのように、見せつけているような気さえした。前述のがらんとした町の風景と、この綺麗な外観の建物・展示されている内容とに大きなズレがあることに、私は、違和感を覚えた。また、私たちが訪れた 9 月 5 日は、双葉町が避難先のいわき市に置いていた主な役場機能を町内に移すということで、ＪＲ双葉駅前で業務を始める新しい役場庁舎の内覧会の取材のためか、カメラを持ったマスコミ関係者らしき人も数人見かけた。メディアで報道され私たちが受け取る情報は、このように表面的で見かけの印象が強い一部の真新しい施設の復興が、土地全体の復興として刷り込まれていることが現地に足を運んでみてよく分かった。長期にわたる深刻な問題が何一つ解決されないまま、埋もれてしまっていくことの怖さも感じた。一つの情報だけでは真実はわからない。違う視点で物事を捉えてから全体を理解していく大切さを学んだ。

2022.9.6　いわき市

古滝屋　震災考証館　Ｆスタディツアー

　最終日は、古滝屋館主の里見氏のガイドを受けながら、宿の中にある考証館を見学した。考証館でまず目につくのは、流木が重なり合っているオブジェのような展示物だ。これは、当時小学 1 年生だった女児が震災により行方不明となったのちに、その父親が 5 年 9 か月を経てやっと遺骨の一部が見つかったという捜索現場を再現したものであるという。津波によって行方不明になり、直後に起きた原子力発電所の事故により、すぐに捜索活動ができなかったその期間の父親の当時の思いを想像すると、身の置き場がないほどの苦しみの中を過ごされただろうと思った。そして、今もなお、捜索は続いているのだそうだ。

　次に、マイクロバスで双葉郡を中心にガイドしていただいた。まず富岡町では太陽光発電のパネルが広い敷地に一面張り巡らされている場所が異様であり印象的であった。そこは、当時は田んぼであったが、放射能被害によって農地が価値のないものとなってしまい、代々そこで農業を営んできた地元の方の思いは置き去りになっていると感じた。そして、夜ノ森駅周辺の住宅地に入り下車して住宅街を歩いたが、昼間であるのにも関わらず、異様なほどひっそりと静まり返っていた。風の音が気になるほどだ。住宅はまだ新しく築年数の浅いもの何件かあり、中には窓ガラスを意図的に破壊したであろう痕跡も見受けられる住宅もい

くつかあった。隣り合う家々がこんなにもひどい光景になっており、災害とは人の心までも異様にさせる力を働かせてしまう恐ろしさを肌で感じ取った。外から見る住宅の様子で過去にここで実際に生活されていたという、一番生活感が感じられたのは、窓際に洗濯物が干した状態のまま避難された住宅を見た時だった。幼児のものであろうその小さなサイズのTシャツや、玄関先に置かれたままになっていた三輪車は、戻ってくることのない主をいつまでも待っているようなそんなことを感じさせられ、辛く胸が苦しくなった。ここは本当に時が止まった場所のようだった。

最後に、この実習を通して、東日本大震災について様々なことを深く、深く感じ考えた。各地で見て聞いて感じ、東日本大震災というものは、大規模で広範囲、しかも複合災害であるがゆえに復興にも長期間を要し、様々な問題もあるということを深く考えさせられた。現地に足を運ばなければわからないことが、多く存在していることを実感した。この5日間は大変貴重な時間であり、忘れられない体験となったことは間違いない。この経験を、証人としてまずは、身近なところから、家族に、そしてこれからの世代の子供たちへ私が学んだことを丁寧に伝えていこうと考えている。

このような機会を与えてくださった、村本先生、団先生、鵜野先生、事務局の平田さん、プロジェクト実行委員会の方々、関係者の方々に深く感謝している。

白河小峰城の復元された石垣

富岡町の太陽光発電パネル

JR常磐線　双葉駅

震災遺構　請戸小学校

熱い鉄

臨床心理学領域Ｍ１　向井直史

熱した鉄を叩くと、もはや元の姿ではない。燃える熱も、溢れようとする形の広がりも、鍛えられ整えられた刀からは覗けない。激しい熱のまま取り出したい、だがそれでは形にならない。形にしたい、だがそのころには熱い鉄は消えている。

私は、本プロジェクトで見聞きした様々な光景や人々の話を報告することは、他の大学院生に任せようと思う。他の様々な大学院生たちが、被災地で見た光景や、聞き取った話、それらを通じて感じた衝撃、疑問、葛藤などを報告しているはずである。私はただこの場を用いて、読者の方に向けて一つお願いごとをしたいだけである。そのお願いごとというのは、自分の足で行ってみてほしい、と言うことである。もう一度言う。私があなたに伝えたいことは、被災地に自分の足で行ってみてほしい、ということだけだ。

私は本プロジェクトの中で、福島県双葉町に訪れる機会があった。双葉町には伝承館という、3.11 の被害を展示している施設があり、双葉駅という駅から送迎バスが出ている。その送迎バスには乗らず、駅から徒歩で伝承館まで向かうと、実に様々な町のようすが見えてくる。町の様子を報告した文章は他の学生のものの中にもあるため、ここで詳細を繰り返すことはしないが、双葉では震災の影響であちこちが傷つき、にもかかわらず原発事故の避難のために人がいなくなったまま 11 年が経過した町を歩くことができる。正直に言うと、その町を自分自身の足で歩いてみた感想を述べようとしても、言葉にならない。述べると言っておいて言葉にならないでは不誠実かもしれないが、言葉にならないということを感じたのだ。何を言ってもあの衝撃をぴったりくる形で伝えることはできない。燃え上がるような衝撃で熱された鉄が目の前にあるのに、どこから鎚を振るえばいいのか分からない。むしろ叩けば叩くほど、鉄は形を変えていく。無理やり言葉に落とし込もうとすればするほど、あの衝撃から零れ落ちるものがある。私が本プロジェクトに参加して得た大きな教訓の一つはそれだ。言葉では表現しきれない衝撃というのはある。

私がそのような伝えられない衝撃を双葉町に関して得られたのは、私が実際に双葉町を訪れたからだ。私を含め、本プロジェクトに参加した学生の多くは、初めて被災地を訪れ、今なお続く有形無形の被災の爪痕を目の当たりにした。そしてそこで様々なことを感じ、考え、気づき、個々人の文章を書いている。「現地に行くこと」は、行って、終わりになることではない。一度行くと、感じずにはいられない。考えずには、気づかずにはいられない。火が付くのだ。火が付いて熱されて、それまで硬いままであったものが融けて形を変え、新しい形を求め始める。人によってはそれが自分の無知を恥じる経験であったり、行ってみてもやっぱりよく分からなかったなという疑問や葛藤であったり、今後の自分の行動を変えようという決意であったりする。いずれにせよ、「現地に行くこと」とは、行った結果として熱された心に巻き起こる様々な体験とセットなのである。

しかし、その心に巻き起こる体験は、現地に行ってみずしては経験できない。他の学生の

文章を読むと「行く前から想像はしていたが、行ってみると想像以上であった」や「行ってみて初めて気が付くことができた」という趣旨の記述を見つけることができるはずだ。そのような記述からは、「“行ってみないと分からない”ということが分かった」というメッセージをくみ取ることができる。ただし「現地に行ってみないと分からない」と何度言葉で伝えても、仮に聞き手が実際に現地に行ってみていない限り、その言葉の意味は本当には伝わらない。だからこそお願いしたい。是非一度自分の足で現地へ行ってみてほしい。

幸いここでは、様々な学生たちが被災地で訪れるべきポイントをたくさん書いている。その内の一つだけでも良い、心に留まった場所に是非自分自身の足で訪れてほしい。そして自分の眼で見、感じてほしい。「なんだ、こんなもんか。あの文章は大げさだったな」と感じたり、反対に「あの文章を読んで分かったつもりだったけど、こんなにも衝撃的だったとは」と感じたりするはずである。これらのことは自分の足で行ってみないことには感じることはできない。また、訪れるべきポイント以外にも、「どのように被災地を知る手がかりを探すか」というヒントも書かれている。被災地を知る手がかりになるものは、何も大々的に前面に押し出されているものばかりではない（もちろんそれらも重要であることは間違いない)。被災のことをよく知る人は、被災者という一人の人間であり、一人の生活者である。外から来た人のために用意された場所ではなく、現地の人々の生活の匂いのする場所を探ってみることもいいだろう。中には、3.11 の面影や影響がさりげなく座っているところを見つけることができる場合もある。お店の人に話しかけてみると思わぬお話を聞かせてくださることもある。また被災地の芸術に当たることもいいだろう。私の拙い文章で表現されていることより、よほど被災者の心の内に迫ることができるのではないかと思う。ただし一人きりでは大変なこともある。仲間を募って協力して行くのもよい手だと思う。そしてなにも暗く深刻な話題ばかりを求めに行くこともない。東北には美味しいものや美しい景色がたくさんある。現地での行程の中でこれらを求める時間を作ることもいいだろう。

鉄は熱いうちに打て。この文章を書いている私は東北から帰ってきてもうじき 3 週間が経とうとしている時点にあるが、既に東北を訪れた時の光景や感覚を忘れ始めていることを感じる。あれだけ衝撃を受けたはずなのに、どこかぼんやりとして自分が何を感じていたかあやふやになっていく。完全に燻らないうちにこの文章をまとめることができて安心している。私は忘れたくないのに忘れることに危機感を感じているが、一方で忘れたくないのに忘れる体験をせずして、どのように忘れていくことの危機感を被災地の方々と共有できるだろうか？そして忘れていく危機感を経験せずして、どのように本プロジェクトのテーマの一つである「継続すること」の意義を実感できるだろうか？現地に行く以前はこのようなことは考えもしなかった。これらの問題意識は現地に行ってみるという体験からつながっている。だからこそ、文字を読むだけでなく、実際に自分の足で行ってみることには意義がある。私があなたに伝えたいことはそういうことなのだ。

フィールドワークを終えて思うこと

実践人間科学領域 M1　土生　美枝

2022 年 9 月 2 日～6 日、立命館大学人間科学研究科の実習として、私は宮城県と福島県を巡るフィールドワークに参加した。仙台市をスタート地として、多賀城市、白河市、いわき市を宿泊拠点としながら、最終日は双葉郡にも足を延ばした。全日程を終えて大阪に戻り、2 週間が過ぎたいま、何が心に残っているのか振り返ってみた。

スケジュールはざっくり、以下の通りであった。
＜みやぎ民話の会＞（2 日）
＜おおぞら保育園トレーラーハウス訪問＞（3 日）
＜団士郎家族漫画展＆トーク＞（3 日）
＜東北歴史博物館＞（3 日）
＜小峰城訪問＞（4 日）
＜団士郎の漫画トーク＞（4 日）
＜ママカフェ@しらかわ　震災 11 年を聞く＞（4 日）
＜伝言館訪問＞（5 日）
＜震災遺構浪江町立請戸小学校＞（5 日）
＜東日本大震災・原子力災害伝承館＞（5 日）
＜古滝屋震災考証館と F スタディツアー＞（6 日）

フィールドノートを開くと、それぞれの光景が脳裏によみがえり、印象的な場面や言葉が思い出される。一口に被災地といっても、とりわけ東日本大震災の場合は、被害の程度や内容が多岐にわたり、一人びとりが懸命に災厄を乗り越えてこられたことを実感した。フィールドワークを行うことによって、書物から得られるのとは違うものを、確かに受け取らせていただいたと思う。

数ある場面の中から、私は福島県初の震災遺構・浪江町立請戸小学校＝**写真左**＝への訪問を自転車で行い、その道すがら感じたことを報告したい。

請戸小学校は、海岸から 300 メートルの位置にありながら、奇跡的に児童・教職員 95 人全員が生還した小学校だ。その避難のプロセスが、津波被害に遭ったまま保存された校舎を舞台に、

様々な展示で紹介されている。その中には、当時の児童が、10 年を経てふるさとへの思いを綴ったメッセージもある。圧倒的な津波の破壊力に言葉を失い、懸命に生きる元児童たちの文章に目頭を熱くした。

原子力災害伝承館から請戸小までの約 3 キロは、観光用に無料で貸し出されている自転車で往復した＝**写真左は帰還困難区域を示す看板**。整備中の防潮堤が一部とぎれ、そこから水平線がちらりとのぞく＝**写真下**＝以外は、一面に腰ほどの高さの雑草が生い茂る。ところどころに、「因幡の白ウサギ」が傷を治すために使ったとされる薬草の、ガマの群生が見られた。中景には、こんもりとした樹木が風にそよぐ。

息づく自然を見せつけるかのように、空の雲は早足だ。

しかし、そこには人家も、人影もない＝**写真下**。大型トラックや重機を操る作業員が、それらの窓から時折、顔をのぞかせるだけだ。駐車場か資材置き場にでもするのだろうか、雑草を電気草刈り機で刈る 4 人の男性が草原のなかに見えたときは、この土地を踏みしめる人が居ることに、違和感を持ったほどだ。

この HP を見る方には、ぜひ、現地に足を運んでいただくことを提案したい。その経験は、あなたの「その後」を照らし出してくれるはずだ。もっともっと生きたかった人たちの代わりに毎日を過ごしていることを、一人でも多くの人たちと共有したいと、私は思う。

最後に、かつて住宅街があった一帯の現在の様子を紹介して、報告を終えることにする＝**下の写真は、原子力災害伝承館に隣接する双葉町産業交流センター屋上からの眺め。左手の林の向こうに請戸小学校がある。**

一帯は、被災前は住宅地だった。今は住む人はなく、被災の痕跡をきれいな形で残し、整備する作業が行われるばかりである。

東日本・家族応援プロジェクト+（プラス）に参加して

実践人間科学領域Ｍ１　濱本良枝

今回のプロジェクトでは宮城県多賀城市にお邪魔した。
降り立ったＪＲ多賀城駅の駅舎はとても美しく、駅前広場も整備されており、駅舎・線路と並行して流れる砂押川も今は静かに流れている。美しく整備されているため、この辺りが被害に遭ったということが信じられない。震災を感じるものは、電柱に掲示されている震災時の津波の位置を示すプレートのみだ。国道も交通量が多く、人も普通に歩いている。震災後１１年を経過して、普段の生活をすっかり取り戻しているように見えた。

翌朝、ホテルの８階で朝食を食べたのだが、そこからは町全体が見渡せた。落ち着いた町並みが拡がっており、もはや倒壊している建物などは見つけられない。本当に津波がこの場所を襲ったのだろうか？震災の傷跡は跡形もないように見えた。発災時どのような状況であったのか、全く想像できなかったので YouTube で当時の映像を探して見てみる。今もホテルから見える看板と同じものを掲げる建物が YouTube に映る。黒い濁流が道をまるで川のようにして、かなりの速度で流れていく。ダンプや車の上には逃げ場を失ってじっとしている人が映っている。タンクローリーが流されてきてダンプにあたりそうになりひやりとするが、間一髪で木に引っかかり止まった。撮影者は近くのビルの踊り場から撮影している。他にも多くの人が避難してきているようだった。「ああ、あのあたりで実際にあったのか。」今ある建物と、映像を見てようやく実感が湧いてきた。

その日の午後、タガの柵ツアーに参加して、実際に町を歩いてみた。多賀城は実は海から非常に近いところに町がひらけていて、思わぬところから砂押川手前まで津波が押し寄せて来ていたということを知った。多賀城の津波被害を大きくしたのは、海からだけでなく、川を遡上した津波が堤防を決壊させ、そこから町に水が流れ込んだことにもよる。津波は想定できない二方向から押し寄せたのだ。震災当日の寒さは厳しく、雪が降る中人々はとりあえず歩道橋やビルの外階段に逃げた。すぐに引くだろうと思った水はなかなか引かず、結局その場所で寒さに震えながら過ごさなければならなかったという。津波にのまれながらなんとか引き上げられ一命を取り留めた人も、夜の寒さに耐えきれず、亡くなった方もあったそうだ。津波の被害は家の塀などにうっすらと残っていた。油などを含んだ水や流れ込んだ漂流物などによる傷で、壁に横にすーっとその形跡を見る事ができた。「１１年経っても、津波被害の後は消えないんです。」と、ツアーのガイドさんが話してくれた。

そのガイドさんにツアー終了後、「すっかり町は復興したようですね。」と話しかけたところ「町はきれいになりましたが、１１年経ってもまだ復興したとは言えないです。」と語った。

多賀城では、「おおぞら保育園」園長の黒川恵子氏と元多賀城市職員の丸山氏から震災直後のお話を聞くこともできた。黒川氏は、保育園の園長として預かった子ども達の命を守るため必死に行動されたことを淡々と語られた。震災直後避難所まで砂押川をトトロの『さん

ぽ』を歌いながら歩き、避難所では寒く暗い中、自分のコートを子どもに着せてやり、窓の外の赤い火の影を子ども達に見せないように苦心しながら過ごしたそうだ。そのときの黒川氏の不安な気持ちはいかばかりであったろうかと思う。

黒川氏は最後に「故人の無念の思いを抱えて生きていく。命を落とした人たちの分まで頑張って生きたいと思う」と語られ、涙された。震災の経験は、経験した方の記憶に『焼き付いた経験』として今も残っている。

丸山氏は行政職員として避難所運営に携わられていた。ご自分も被災者でありながら、公務に専念しなければならなかったとのこと。しかもそれが長期間に渡った。避難所の集団生活の中で起こるいざこざ、電気やトイレなど生活に直接関わる問題、それらに丁寧に対応してこられた。想像を絶する大変さであったろうに、自分の大変はさほどなかったかのように淡々と話される。一方、他都市からの応援、ボランティアの支援、義援金等全国からの支援に自分たちは支えられたと心からの感謝の言葉を述べられた。「どうしても震災の記憶は薄れる。それは仕方が無いことだが、（立命館が）このように毎年訪れて話を聞いてくれる機会が継続していることで、そのたびに私たちも震災経験を思い出すことができている。」とお話してくださり、継続して訪問し語りを聞き続けることは、単に被災された方々の側に行って寄り添う心理的な支援という側面だけでなく、震災体験の継承にも役立つのだということを教えていただいた。

「東日本大震災のことはよく知っている」と思っていたが、実はどこか「他人事」で「遠い土地での出来事」でしかなく、表面的な知識でしかなかったということに今回プロジェクトに参加して気がついた。実際に東北に行き、自分の五感をフル活用して体験することにより、東北の震災はようやく確実に「我が事」になったと思う。知識の定着は以前より深く、より真剣に考えるようになっている。そして、何か私にできることはないかと考え始めている。多くのものに気づき、吸収した。非常に学びの多いプロジェクトだったと思う。

宮城・福島へ、訪れた先にあるもの

臨床心理学領域 M1 安井 久美子

はじめに

2022 年 9 月 2～6 日、私はこのプロジェクトに参加し、初めて訪れた宮城県・福島県でフィールドワークを行なった。もちろん事前学習はしていたが、実際に足を運び、お話を聞くことによって、知る点がたくさんあった。これを読んでくださっている方にとって分かりやすいように、上手く要点をまとめられたら良いのだが、まだ自分の中で消化し切れていない部分もある。そのため時系列に沿って、この 5 日間で学んだこと・感じたことを、長文となるが証人の 1 人としてここに書き連ねていきたい。

1 日目(9 月 2 日)

関西から飛行機で仙台空港に到着し、仙台駅まで電車で移動する。仙台駅を出ると色んなお店が立ち並んでいて、キャリーケースを引く観光客らしき人や、スーツを着て仙台名物である牛タンのお店に並んでいる人など、たくさんの人でごった返していた。そんな中、1 日目の私の目的地は、せんだい 3.11 メモリアル交流館と、震災遺構 仙台市立荒浜小学校であった。仙台駅の近くで十分に腹ごしらえをした後に、地下鉄に乗り込み、荒井駅に向かう。中心街である仙台から離れるということもあってか、だんだんとすれ違う人の数が少なくなってくる。人がまばらな荒井駅の中に、せんだい 3.11 メモリアル交流館はあった。2016 年に建てられた綺麗な建物で、この周辺地区がどんな場所だったかという歴史を辿りながら、震災について学んでいく形が取られていた。1 階にはこの交流館に訪れた人々にとって 3.11 はどんなものだったか、そしてこれからの願いを書く用の短冊が置かれてあり、1 階から 2 階に行く階段の踊り場にも、直近にここへ訪れた方が書いた短冊がいくつか飾られていた。目を通すと、その一人一人が色んな体験をしたり、異なる思いを秘めていたりすることが分かり、改めて東日本大震災という大きな出来事には、たくさんの小さな物語が詰まっているのだと感じられた。思い返すと、私は 2011 年 3 月 11 日当時、小学 5 年生だった。11 年前とは言え、かなりあやふやな記憶になっているのだが、おそらく小学校にいたはずである。関西はそこまで大きな揺れは生じなかったから、そのまま自宅に帰ると、母親がテレビを見ていて、「大変なことになっている」と私に言う。テレビから信じられない光景が流れているのを見て、不安を抱えつつも学習塾に向かうが、塾では友人も先生さえも地震のことで話は持ちきりで、勉強どころではなかった。あの時は、ちょうど父親が東京にいて帰宅困難者となり、親戚が車で迎えに行くことになった。父親が帰ってくる深夜まで、永遠と流れるテレビの報道を自宅で見続け、「これからどうなるんだろう」と思うと、眠気など全く感じなかった。あれから、何か自分にできることはないかと思いつつも、「私みたいな人間が行ってどうなるのか」という気持ちも同時に湧き起こり、勇気が出ず行動に移せなかった自分がいて、この地には 11 年越しにやっと訪れることができたのである。そんな私と同

じような気持ちを短冊に書いている方も中にはいて、共感を覚えた。行動できなかったことに対してずっと後悔していたけれど、過去を振り返るだけではなくこうやって訪れた機会を大切に、これから 1 人の証人として存在するためにも、このフィールドワークでたくさんのことを学ぼうと、せんだい 3.11 メモリアル交流館という場で改めて心に刻んだ。

荒井駅から市営バスに乗り込み、震災遺構仙台市立荒浜小学校前で降りる。目的地に近づくにつれて、窓から見える景色には、田んぼなどの緑が増えてきた。遂に、荒浜小学校へ到着する。最初の感想としては、ネットで見た写真とそこまで印象は変わらないけれど、その建物から感じられる雰囲気は、想像よりも違っていた。一見したところ普通の小学校ではあるが、どっしりとした迫力が感じられたからである。荒浜地区は“災害危険区域”に指定されていて小学校の周りにほとんど建物がないため、実際の大きさよりもさらに大きく見えていた。これも、迫力を感じられた理由の 1 つになっているのかもしれない。津波は小学校の 2 階まで到達したため、その 2 階のベランダの壁(柵のようなもの)が津波の勢いによってひしゃげた姿のまま残されていた。それを実際に自分の目で見ることで、入る前から、強い衝撃を受けた。どこまで激しい勢いで波が来たのだろうか、考えるだけで背筋が寒くなる。

写真 1 ぐにゃりと曲がった柵
※その横には水を含んだのか、膨らんで破れている校舎の壁の様子が伺える

小学校の内部に入っていくと、天井や壁紙が捲れていたり、照明器具が曲がっていたりする。置かれている展示には「“津波は必ず来る”という心構えをしておくべきだ」ということに触れているものが多かった。こうした点を踏まえて、決して被害状況を知って終わりではなく、今後の自然災害に備えて何ができるのか、どこまで被害を抑えることができるのか、そういった過去を過去として完結させるのではなく、これからの未来にどう活かしていくのかを考えていかなければならない、それが私たちにとっての使命であると感じた。校舎の 4 階に上がると、“荒浜の声”という冊子が目に入った。荒浜にゆかりのある方々に寄稿していただいた文章や、写真がまとめられているものだ。その中でも「3.11 後に“絆”の大切さが

叫ばれるようになったが、そうした絆を流行語で終わらせないで、一時的なものにしないでほしい」・「私の心に復興という文字はありません」などといった率直な声が、直筆で書いてあったのが印象的だった。嘘偽りのない彼らの本当の気持ちが、手書きの文章からダイレクトに伝わってきて、知らない間に涙が溢れていた。私はその人たちと全く同じ体験ができるわけではないし、彼らのその時の気持ちが完全に理解できるわけでもない。だが、知ることはできる。そうしたことがあったのだと、伝えていくことはできる。またそうした文書を通じて、あの日から 11 年経ったとしても、当事者ではない周りが勝手に綺麗なストーリーにまとめて、終わらせてはならないと感じた。実際に具体的な被害に遭っていない人たちは、忙しなく過ぎる日々の中で、やはりどんどんその当時のことを忘れてしまう。私もその 1 人であった。あの時、幼いながらもテレビで・ネットで見る映像に圧倒され、ショックを受けて、自分には何かできるのだろうか？震災から身を守るためには何が必要なのか？と考えたはずなのに、自分の中で年々そうしたことを考える時間が減っていってしまっているのが事実だからだ。そんな自分に恐れを感じたのも、このプロジェクトに参加したきっかけの 1 つである。こうして現地に足を運ぶことによって、ネットや本だけで得られるものとは、別のことが得られたと強く思う。だからこそ、当事者に直接お話を聞くことが持つ意義、それはその人の語りによって相手への伝わり方が全く違うからであって、単に文字や映像だけでは伝わらないものが確かにそこに存在し、よりリアルなものとして印象に残るのだと考える。つまり人から人へ伝え聞き、それをきちんと受け止めることによって語り継がれていき、人々の心から忘れられることがなくなって、年月が経ったとしても受け取った人それぞれが証人として生き続けられるのではないだろうか。私もそのうちの 1 人になりたい、そう思った。

2 日目(9 月 3 日)

2 日目は、震災後一時的におおぞら保育園の校舎として使われたトレーラーハウスを訪れ、それから多賀城文化センターに移動して団先生の漫画トークを聞かせていただき、同箇所で実施されていた避難訓練コンサートにも参加させていただいた(同時に避難訓練も行われた)。その後は、タガの柵が運営する 3.11 語り部ツアーに参加した。トレーラーハウス内では園長の黒川さん、多賀城の職員であった丸山さんからお話を聞く。お二人の語りは、自らの経験をありのままに語るからか胸に迫るものがあり、そして何よりも多賀城という場所が好きだという気持ちが、聞き手側である私たちにグッと伝わってきた。さらに、お二人は“感謝の言葉”を何度も口にする。自分がもし同じ立場にいたとしたら、そんなふうに語れるのだろうか。最後に丸山さんからいただいたプリントには「人との出会いの中から、感謝を学んだ」といった記述もあった。言葉で上手く表せないが、人と人とのつながりによって傷つくこともあるけれど、そうしたつながりから得られる癒しというのは人間にとって大きなもので、それがあったからこそお二人のように自分が置かれている状況を色んな視点から眺め、前向きな姿勢で進んでいけたのかもしれない。辛いこともきっとあったはずだが、

自らの体験を私たちに語ってくださる黒川さんと丸山さんの姿は、とても力強く見えた。

3.11 語り部ツアーでは、松村さんからガイドを受け、多賀城の街を歩きながら色んなお話を聞いた。松村さんは、3.11 の震災当時には東北地方に居なかったそうだが、家族や周囲の人の話を踏まえて、「冬場に津波が来た際、屋外の津波避難施設や歩道橋などでは寒くて日を跨いで過ごすのが難しい(津波から逃れても寒さで亡くなってしまうかもしれない)。屋内の、安全な建物に逃げ込んだ方がいいです。」と、私たちに対して何度も語りかける。津波が来たとき、もし近くに屋外の津波避難施設や高い建物があれば、そこに逃げ込めばよいだろうと、今思うと楽観的に考えていた。しかしそこで一夜を過ごすとか、何日間か滞在しなければならない可能性が少なからずあるとなると、やはり長期的な視点が必要で、「自然災害に備える」ということは、起こる前や起こった時のことだけではなく、そうした自然災害が“起こった後にどうするのか”を考えることでもあるのだと、そこでようやく気付けた。さらに多賀城の街を歩いていると、電柱に津波到達点の看板がくくりつけられているのをよく目にした。これは多賀城市に住んでいる学生の案だと、松本さんからお聞きした。津波が来る映像などはもちろん見たことがあったが、自分の身長(174cm)よりも高いところまで水が来ていたことがそうした看板からよく分かり、よりリアルに津波に対しての恐怖を感じた。

写真 2：赤い丸の部分が、自分の身長(174cm)よりも高い位置にあった津波到達点の看板

他にも住宅の塀に津波が来た形跡が、白い線のような形で残っているのも、多々目にすることがあった。何も考えずに歩いていると 11 年経ってまるで普通の街並みに戻ったかのようにも見えるが、多賀城に津波が来たということは、紛れのない事実なんだと再確認した。

写真 3：少し見えにくいが、真っ直ぐ横に伸びる形で津波の跡が白く残っている

安全神話ではないが、これまで自分が住んでいるところに自然災害が起こったことはほとんどないのもあって、津波が来るかもしれないと想像したことがなかった。しかしホテルに帰って改めて地元の地形をネットで調べてみると、意外にも川や湾岸といった水辺が近くにあった。松村さんが「多賀城の人たちにとって自分が住んでいる場所に、海が近くにあるとは感じていない人も多く、そこまで“津波が来るかもしれない”と意識して生活していなかったようだが、地図を見てみると思っているよりも海との距離が近いことを感じられる」と仰っていたことを思い出し、その言葉に強く共感を覚えた。もっと自分の街の地形のことを詳しく知っておき、色んな可能性を考えながら、緊急時にはどこに避難したら良いのかなども、家族を始めとした身近な人と話し合っておく必要性を感じることとなった。

3 日目(9 月 4 日)

白河市立図書館で行われた「あそびのひろば」の運営スタッフとしてお手伝いをさせていただき、プログラム終了後は“福島”という土地でそれぞれ色んな活動をされている方々から、お話を聞いた。「あそびのひろば」のプログラム内の 1 つでは、しらかわ語りの会から、語り部の方がいらっしゃって、ふるさとの民話を話してくださった。私は今回、初めて語り部の方による民話を聞いたのだが、「こんなにも惹き込まれるのか！」と純粋に驚かされた。実はその時間、私は受付を担当していたため、最初は耳をそば立てていただけだったのだが、声ひとつで全てを表現しているのにもかかわらずグッと物語の世界に誘われ、終いには部屋に入って体全体を語り部の方が見える方向に向けて聞いていたのである。すごいパワーだった。一方で参加していた子どもたちは元気がいっぱいでそれぞれの時間を楽しんでおり、最初は民話が始まってもそこまで聞いていないように思われた。しかし合間合間で登場人物のセリフを言っている時や、重要なシーンは語り部の方にとって力が入っていること

もあってか、子どもたちが急に静まる時間が見られたのは、非常に不思議だった。内容をきちんと理解していなくても、あの独特な語り口に何か感じるものがあるのかもしれない。他にも鵜野先生が行う手遊び唄や、ライアー演奏・お手玉遊び・木製のおもちゃでイキイキと遊んでいる子どもたちの様子を見て、彼らを育てていくにあたっては、五感(特に聴覚と触覚)で感じるものを豊かに提供していくことが大切なのではないか、そしてそれらを提供するにあたっては彼らにとって安全で、安心できる場所を大人たちが確保していかなければならないのだと、考えるようになった。

「あそびのひろば」を実施した部屋を片付けた後、休憩時間に入り、このプログラムにボランティアとして参加していた高校生 3 人と昼食を食べにいくことになった。地元の方がオススメしてくれたお店で白河ラーメンを注文し、それがテーブルに届くまでの間、何気ない会話をする。その中の 1 人が「おとめ伝説」という、白河小峰城とその近くにある桜の木に関わる伝説について教えてくれた。院生グループのメンバーを含めその話で盛り上がっていると残りの高校生 2 人も、自分にも知っている伝説や民話があるといったふうに、話してくれた。また小学校の時に語り部クラブなるものがあって、そこでご年配・ご高齢の方から民話を教えてもらい、それを踏まえて今度は自分がみんなの前で民話を話すといった活動をしていたという子もいた。前述したように「あそびのひろば」でも語り部の方が来てくださっていたので、東北地方では、それぞれの土地にある伝説や、長年続いている民話を一部の人だけではなく、地域全体で大切にしているのだと、この 1 日を通して実感した。また自らボランティアを志望し、初めて会う人たちとともに一生懸命に活動している彼女たちや、精力的に福島県の保護者や子どもたちのために活動している方々のお話を聞いていると、私も自分なりのやり方で頑張らなければならないなと、襟を正すような思いがした。

宿泊地の古滝屋にある露天風呂に入り、夜空を見上げながら 1 日の疲れを癒す。もしも観光としてこの地に訪れていたら、今とはまた違った思いで過ごしているのかもしれないと思った。しかし 3 日間ほど宮城・福島で過ごし、美味しい食事や、コロナ禍に県外から来た私たちに対しても親切な方々との出会い、綺麗で豊かな風景を見たことによって、必ず東北へまた足を踏み入れようと自然に芽生えたこの思いは、きっと変わらないだろうとも感じていた。

4 日目(9 月 5 日)

4 日目は、ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館(以下：伝言館)と、東日本大震災・原子力災害伝承館(以下：伝承館)を訪れた。それぞれでお話を聞いたり、展示を見たりしたのだが、前者と後者で感じ方が異なった。宝鏡寺内にある伝言館では安斎さんと、そのお寺の住職である早川さんから、お話を伺った。安斎さんは専門家の立場、早川さんは住民の立場に立って、3.11 の原発事故が起こるずっと以前から原発の安全性について訴え続けていたそうだ。早川さんは、原発の燃料デブリが無害になるまでは 10 万年ほどかかると前置きした上で、「復興という名で今進めているが、原発事故のことを考えると、それはもっ

と先のことである。原発は、復興の上になんて乗っていない」と、自らの思いに怒りを乗せながら、語ってくださった。この言葉に、私はとてもハッとさせられた。あの原発事故は、現在進行形で、しかもまだまだこれから気が遠くなるほどの時間が必要なぐらいの被害だったのだ。放射性廃棄物だって、取り出した後はどうなるのか、そもそも全部を取り出すのにどれくらいの時間がかかるのか。問題は、自分の想像していたよりも山積みであった。こうした問題に対して「自分には関係がない」と目を背けることなく、そして政府や権威を持っている人の判断にそのまま従うのでもなく、国民一人一人が考えていかなければならないはずだと思った。また伝承館では、新たな技術を用いながら、たくさんの資料やインタビュー・実際の品を展示することによって、3.11 に起きた震災や原発事故(＝複合災害と呼んでいた)について・その後の東北地方における復興の挑戦について伝えようとしているのだと、感じられた。ただどちらかというと公的な機関である伝承館と、民間の機関である伝言館の間にある隔たりというか、どこに視点を置いているかに違いがあるように思われる。実際にあったことをどうやって乗り越えていったか、そしてそれらを教訓としてどのようにこれから生じるであろう災害に向けて防災・減災につなげていくかというのは、もちろん大切だ。しかし 11 年前の原子力災害による被害は決して終わりではなく、むしろこれからが重要になってくるはずである。私たちの選択が、今後の未来のあり方を決めていくのだから、訪れてお話を聞いて納得して終わりではなく、自分の頭で考え続けることをやめないでいたい。さらにこの文章を読んでいる方も、ぜひどちらの施設にも足を運び、それぞれが抱いている「伝えたいこと」の違いを、感じていただきたいと思う。

5 日目(9 月 6 日)

最終日である 5 日目は、F スタディツアーに参加し、3・4 日目に宿泊した古滝屋の当主である里見さんにガイドをしていただいた。まずは古滝屋内にあり、里見さんが館長を勤めている原子力災害考証館(以下：考証館)を訪れ、詳しい説明を受けた。考証館の中央には、インスタレーションという形で、実際に大熊町から持ってきた木材と、被害に遭った 1 人の女の子の遺品が組み合わされて、置かれている。その女の子のお父さんが、自らの手で作ったものだそうだ。女の子は長い間行方不明になっており、最初は原発事故による放射線被害によって捜索も思うようにいかなかった。それでも捜索を続けていると彼女のマフラーが見つかり、その中に顎の骨があったため、5 年 9 ヶ月ぶりに父娘は再会することができた。その実際のマフラーを触らせていただいたのだが、こんなにも小さくて軽いマフラーを巻く女の子が津波によって命を落としてしまったのか、あるいは放射線被害のために捜索中止を余儀なくされて救えなかったのか…。色んな可能性を考えると、何とも言いようのない気持ちになった。里見さんが「地震や津波は“自然災害”だが、原子力事故は“人災”であるため、分けて考えている」と仰っていたように、前者は起こってしまうことを前提として減災をするのが現実的だが、後者は減災だけではなく、そもそも防災から取り組むことができるのではないかと思った。

古滝屋からバスに乗り込み、改めてツアーが始まる。車内の中で行われる里見さんのお話は、非常に熱意がこもっており、私たちに自らの経験やこの地で起こったことを話して、ぜひ周りへ伝えていってほしいという気持ちがひしひしと伝わってきた。私もその気持ちに応えたい、その思いが強くなり、聞いているうちに自分の体に力が入るのが分かった。しばらくするとトイレ休憩になって、ならはパーキングエリアで降りると、放射線量を示す機械が設置されていることに気付く。これまでも竜田駅や双葉駅といった駅構内に、空間線量率を表示している機械が設置されていることが確認できていた点もあって、関西に住んでいると気にも留めていなかったことが、福島に住んでいる人々にとって当たり前になっているのだと感じた。

バスは、夜ノ森駅の前で停車した。この駅は 2020 年に新設され、駅周辺では他にも急に新しく建物が建てられるようになったそうだ。それ自体は悪いわけではないと思われるが、日本でオリンピックが行われる予定だった 2020 年に合わせて急ピッチで動こうとしていたのではないか、“災害や原子力発電所事故によって大きな被害があったけど、元通りになりました”という対外向けの PR に使われたのではないかというふうに考えられていると、里見さんは語った。そう思ってしまうほど、実際に私たちから見えた駅の周りは震災が起こった当時のまま変わらない。止まってしまっている。色褪せたポスターとか、ぼうぼうと生えた雑草、塗装が剥げている自動販売機やポスト…、そんな中でも駅だけ妙に新しいという、異様な光景であった。また構内から見える夜ノ森駅を通る 2 つの線路は、一方の線路のそばは人がもう住んでいる場所で、もう一方の線路のそばには入ることはできてもまだ人が住むのは数年かかる(私たちが降り立った場所)といったふうに分かれていたので、こんなに近くに隣接している場所であるにもかかわらず、まるで見えないバリアが張られているかのような、そんな感覚がした。

写真 4：夜ノ森駅内から見た線路

※写真から見て左側が人が住める地域、右側が住むには数年かかると言われている地域

今度は富岡町にかつてあった住宅地の前で、バスから降りる。里見さんからお話を聞きながら、街を歩いていく。この日、見上げた大きな空。あんなにも燦々と輝く太陽の下で、悲しくなったのは初めてだった。11 年前は、この住宅地にたくさんの人が住んでいたはずなのに、今は県外から訪れた自分たち以外誰もいない。私の中で「ここの場所は放射能によって冷凍保存された」と呟いた里見さんが、非常に印象的だった。こうした様子を目にして、これまで「復興」という言葉を軽々しく口に出していた自分を恥じるのと同時に、まだまだ何も終わっていない現実に対して、そして今の自分がこうした現実を変えるために何ができるか分からないことにも怒りを覚えた。

写真 5：窓から伺える部屋の様子は、あの日から止まったまま

フィールドワークを終えて

福島からの帰り道、乗り換えをするために品川駅で降りると、眩い電球と人の多さに圧倒された。これまで生きてきて人混みだって特に珍しいものでもなく、明るい電飾に見慣れていたつもりだが、この 5 日間を過ごしてみると、何だか違う感覚になる。上手く言えないけれど、こうした電力がどのように生み出されて、どこからきているのかということを、今までの無知な私は考えたことがなかった。そして 11 年前の原発事故によって、未だに自分の故郷へ自由に行き来できない人・帰らないという苦渋の決断をした人があんなにもいるということも、私はきちんと分かっていなかった。しかし、もしかしたら、それは私だけではないかもしれない。こうやって暮らしている人や、この文章を読んでくださっているうちの何人かは、そういうことを知らずに過ごしていた可能性も十分にある。今まで知らなかった私がそれを責めるような立場ではもちろんないが、だからこそ、“誰かの幸せは誰かの犠牲の上に成り立っている”、といったような言葉が頭によぎり、複雑な気持ちになった。

以前にある方から、こう言われたことがある。「対人援助職を続けていくには、相手を助

けたいという思いで突き進むのではなく、相手に興味を持ち、知りたいと思い続けることこそが大切である」と。対人援助職としての振る舞いにかかわらず、こちら側が「〜したい」と思って動いていくことは、悪ではないにしろ自分本位で些か傲慢であり、私たちは対等な関係でいられなくなって、当事者に対して失礼にあたってしまうかもしれない。しかし関心を持ち続けていくことや、実際に現地に訪れたりすることによって、そこには確かに小さな“つながり”が生まれる。色んな人からお話を聞いていく中で、彼らが一時的ではない、継続的なつながりの重要性を語っていることが、多かったように思われる。つながり続けることは、簡単なようで難しい。私がこの文章を書いている今、あの濃密な時を過ごした 5 日間から 3 週間ほど経っている。こうやって振り返る機会を作っているから、実際に経験したことがない自分が証人としてあるべき姿とは何だろうと考えているのであって、団先生が漫画トーク内で「変化は自然であって、人が忘れてしまうのは悪意ではない」と仰っていたように、そして里見さんが「人間本来が持つ危機本能が、便利な世界の中で削れているような気がする」と仰っていたように、全てが当たり前にある日常生活に戻ると、一大学院生の自分でもできるような役割さえも忘れてしまうかもしれない。いや、忘れない、忘れたくない。自分には関係のない話として、終わらせてはいけない。正直に言って、対人援助職を目指して大学院に進学しているにもかかわらず、最近は自分のことで精一杯で、周りに目を向けることが難しくなっていた。しかし私の生活は自分 1 人で成り立っているのではなくて、色んな人の手が加わって初めて暮らしていくことができているのだと、宮城・福島県を訪れて改めて知れたと思う。丸山さんは「全てのことに対して、人ごとと思わないで、我がことと思ってほしい」と語った。もしも人と人が協力し合うことによって、この世界が成り立っているのならば、同じ世界に暮らし、同じ時を過ごす者として、今起こっていること全て、自分にとって関係のないものなどないと言える。ただ今すぐに、その全てを自分ごととして捉えるというのは現実的に考えて、難しいだろう。だからまずは“知ること”、そしてその 1 つ 1 つに対して「自分ならどうするか？」を考えていくことから、始めていきたい。また今は情報社会で、ありがたいことに片手でちょっと調べるだけで色んな情報が手に入ったり、映像を見たりできる。しかしそれで全て分かった気になるのは、全くもって早計である。その出来事の背景は？埋没されている見えないものは？、実際はそういったことが大切なのだと、現地へ足を運んで思い知らされた。ここまで自分の中でまとまらずに長々と書いてきたが、今この文章を読んでいる貴方にとって、私のように東日本大震災を知ることから始め、もっと理解するために実際の場所へ行き、考え続けていくといった流れの、本当に小さなとっかかりにでもなれば、それ以上の嬉しいことはない。

富岡町で見上げた空の青さ、いつもより早く見えた雲の動き。あの時に感じた気持ちを伝えていける人間になりたい、自宅に着いてベットに潜り込んだ私はそう強く決意し、きつく瞼を閉じた。

何側面もの現実を知っていく

心理学領域 M1　渡邊咲花

9 月 3 日に宮城県の松島海岸に行った。海岸沿いには遊歩道や広場があり、天気が悪くて景色はあまり綺麗ではなかったが、震災の面影は微塵も感じられなかった。しかし、実際には松島海岸も津波の被害を受けており、震災被害を記した看板も置いてある。松島離宮という道の駅のような建物では、そこで働いていた方から松島離宮が建っていた場所はもともと松島パークホテルというホテルが建っており、津波で流されてしまったそのホテルの形と似せて松島離宮が建てられたのだという話を聞くことができた。5 日には福島県の請戸小学校に行った。松島海岸とは対照的に、長らく人の入れない場所であった小学校周辺の元住宅街は雑草が生い茂り、ところどころで工事中なのか盛り上げられた土が見られた。小学校の体育館には蛇がいた。小学校からは持ち上げられた土の色か雑草の緑色くらいしか見られない。長く、人がいなかった証拠なのだろうということがよく分かる。片や完全に震災の痕が消える 11 年、片や雑草と土の色しか見えず野生の生き物が建物を住処としていた 11 年。人の手が加わった時間と放置された時間の違い、そしてこれだけの差がついてしまうほど長い時間が経ったのだということを痛烈に感じた。

その一方で、震災後の被災地を見た全体の感想としては、実際それほど衝撃は受けなかった。津波の被害を受けた場所に関しては私が以前に津波によって被害を受けた海岸沿いやその周辺を見たことがあったからだろう。福島の避難区域だった場所では雑草が伸び切ったもとは家があった場所、土で盛り上げられ何かが建つのか恐らく工事がされている場所、窓が割られ放置された家といった人がいなかったことがよく分かる光景が広がっていたが、私はそれらに懐かしささえ感じた。田舎にある実家近隣の景色とよく似ていたのだ。放置されていた場所も本当に時間が止まっていたわけではなく、風化し、変化していく。そうして震災と関係なく人の手の加わらなくなった土地、つまり過疎化した田舎にあるような、人の住まなくなった土地の景色と遜色ないものになる。福島の震災当時から変わらないという場所を見たとき、たとえずっと人の手が入らなかったとしてもいつかは震災の傷跡は見えなくなっていくのだと感じた。だからこそ民話や公的ミュージアム等を使って、何があったのかを写真や人の声や言葉で伝えていかなければならないのだろうと痛感する経験となった。

宮城と福島では、原子力発電所や震災だけでなく、風力発電所や太陽光発電所の話を聞いた。原子力発電所の事故では国や東京電力が対策を怠った人災である、原子力発電所を再稼働させようとしている、風力発電所の風車を作るために山を削っているが削った山から土砂崩れが起きる、太陽光パネルが眩しくて近隣住民が迷惑している、パネルの寿命がきた後放置される傾向にあるといった話である。いずれも、これをしているのは東京や関西といった都市部の電気会社であり、東北の住民は都市部のために犠牲になっているのだと締めく

くられている。現地の方々がこのような気持ちを抱くのも理解できる。すべてにおいて一定のリスクがあり、それを被る側が止めてほしいと思うのは当然だ。一方で、違和感もあった。現地の方々の話を聞いて共感し、同情し、寄り添い、国や都市部や電気会社の主張を批判的に見る、それだけでいいのだろうかと疑問が湧いた。私たち第三者は直接的には関わっていないからこそ感情を抜いて、客観的に事実を見ることができるという利点があるのだと思っている。東京電力や行政の言い分は批判的に受け止め、現地の方々の話は受容的に聞くのは、私には偏った見方に見える。震災当時からニュースを見ながら疑問に感じていたが、今回の実習でも痛烈に感じたことである。このように感じるのは私が原子力や天災に怯える民間人だけでなく、行政や電気会社側の苦悩や努力も少しではあるが見てきたからなのだろう。幸いにも私の周囲に大きな被害はなかったが、私は震災を経験しており、身近には電気会社や市に勤める人がいる。今回見てきた震災の跡地や展示物、現地の方の声からだけでは分かりづらい現実を見ている。だから私は一概に国や東京電力を悪とは思えないし、現地の方の声をそのまま受け取ることもできなかった。

東京電力を筆頭に電気会社や国の対応では地元の方と関わろうとする姿勢は感じられないし、地元の方からも電気会社や役所のおかれた状況を踏まえた話は聞かなかった。今回の経験からはお互いに、互いの現実を知らず、知ろうとしていないのだろうと感じた。実際、不快な思いをしている相手を知ろうとするのは難しいものであるが、地元の方にも感情や自分の生活があるし国や電気会社や行政職員にも無視できない事情や私事がある。だからこそ、第三者である私たちが双方の見方を知り、それぞれの意見として受け入れた上で改めて現実的に何が必要で、これからどうあるべきなのかを考えていく必要があるのではないか。そうすることで国や会社の要請と、現地の方をつなぐ役割を果たせるのではないだろうかと感じた。その点で今回行政職員の方の話を聞くことができたのは視野を広げることにつながったのではないかと思う。私自身、避難所で職員が具体的に何をしていたのか知らなかったため、今回それが少しでも知れて嬉しかった。とみおかアーカイブ・ミュージアムで見たつぶれたパトカーのような英雄的な伝え方だけでなく、役所や電気会社に勤める人の苦悩や地道な努力も伝えていってほしい。

最後に、私は被災経験があると書いたにもかかわらず、直接関係のない第三者の私たちとも言っていることに矛盾を感じる人もいるだろう。私はそれらとの関係がありながらも、むしろ双方との関係があるからこそ第三者の視点を忘れないでいたいと思う。また、原子力発電所や風力発電所、太陽光発電のパネルは私の実家近くでも見られる景色である。私自身は今まで近隣のことながら気にも留めていなかったが、先の話は東北のものだけではなく、関東でも、それ以外の場所でも見られるものである。今回知ったことを東北だけの問題と考えず、どこでも起こり得ることとしっかり向き合っていきたい。

震災と伝承

心理学領域 M1 渡邊萌未

メモリアル交流館や荒浜小学校では津波被害を受けた人の体験がまとめられており、様々な体験を読むことができた。家族を迎えに戻った娘や孫が津波に巻き込まれて亡くなったなどの、家族を失った体験が多く記されていた。津波の際の個々のストーリーをほんの一部だが知ったことで、津波が襲う町で起きていたことを想像することができた。

今までの自分は東日本大震災が多くの人が亡くなった災害であり、その中には家族や友人を失った人や間一髪で逃げ延びた人がいることはわかっていても、彼らの悲嘆も恐怖も不安も何も想像することができていなかった。私は出身が茨城県なのだが、非常に近い場所で起きたことにも関わらず、どこか遠い世界の話だと感じている部分があった。しかし、今回災害の様子を被災者自身の言葉で見聞きし、跡地を実際に見たことで、実際にそこに自分たちと同じ人間がいて、各々様々な経験と感情を持っていることを感じ、津波被害が一気に現実味を持って感じられるようになった。

私のように災害を現実のことだと感じられていない人は多くいると思う。他地域の人々に現実で本当にあった出来事であることを感じてもらうには、被災者本人の話や実物を実際に見聞きすることが非常に最も有効な手段だと感じる。災害の被害や教訓を伝えていくうえでは、個人個人の経験した出来事を伝えていくことが必要だと感じた。

また、今回話を聞いていて最も驚いたことは、津波からは逃れたにもかかわらず、翌日を迎えることなく亡くなってしまった人が多くいることだった。津波に流されながらもなんとか歩道橋や立体駐車場に辿り着いたが、震災当日の宮城は雪が降るほど寒く、外のため寒さを防ぐことができず、濡れた身体では厳しい寒さに耐えられずに亡くなる人も多かったそうだ。そのため、津波から逃げるときは絶対に建物内に逃げた方が良いとタガノキツアーの担当者の方が語ってくれた。私は津波が原因で亡くなった人に関する話や逃げ切れた話などは聞いたことがあったが、こういった話は今まで一度も聞いたことがなかった。

この話を聞いて感じたのは、本当に大事な教訓は全く伝えられていないということだった。メディアが発信する情報は数多の困難を乗り越えて生き抜いた話であったり、親しい人間が亡くなった話であったり、言い方は悪いがドラマティックな話がほとんどであるように思う。一方で、この話はまた言い方は悪いが劇的な展開がなく短い地味な話である。そのため、伝承していこうとする人がいるにもかかわらず、あまり広まっていないのではないかと感じた。

聞き手を引き付けるような壮大でドラマティックに情報を提供しないと視聴者を得られないメディアと、実話はメディアが求めるものとは限らないという両者の性質の違いが、本当に伝えていかなくてはいけないことが、伝わらなくなってしまうという事態を引き起こしてしまっているのだと感じた。この問題は東日本大震災のみならず、他の災害でも起きうることである。こうした教訓をどのように伝えていくかが、今後の災害被害の規模に関わっ

てくるのだろうと思う。

このことに関連して、実習内で民間伝承について驚いたことがあったため、そちらも共有しようと思う。私たちのグループは漫画展のボランティアに来ていた現地の高校生 3 人と一緒に昼食をとりに行ったのだが、そこで高校生の 1 人から多賀城にまつわる伝承を聞いた。多賀城のとある桜の木の下には人柱となった女性が埋められているそうだ。これは学校で教わったことらしい。私たちは学校で地域の伝承について学ぶ機会はなかったため、そのことに大変驚いた。他の高校生にも同様の経験があるか訊ねたところ、3 人ともが学校で地域の伝承を教わったと言っていた。民間伝承が多く伝わる東北ならではなのかもしれないが、民間伝承と史実には密接な関りがあるため、地域を知るうえで非常に良い体験だと思った。また、民間伝承は伝える人がいなくてはなくなってしまうが、現在語り部として伝承を伝えている人はほとんどが高齢者であり、家庭の中で伝承を伝えていくことも減ってきている。そんな中、学校で民間伝承を伝えていこうという取り組みは素晴らしいものだと感じた。

民間伝承は歴史や災害を伝えているものが多く、災害や教訓を伝えていくうえで有効な手段だと考えられる。しかし、その多くが口頭や民話集であり、加えて方言が多用され理解がしにくいという特徴がある。そのため、若者の興味を引きにくく、伝えていこうと意識しなければすぐに途絶えてしまう。そこが民間伝承を伝えるうえで難しい点であるが、学校でのこうした取り組みは興味を持つきっかけになりうる。また、民間伝承は 1 つ 1 つが短いため非常に覚えやすい。いくつもある中から気に入ったいくつかを覚えているだけでも伝承に十分に貢献できる。他の地域でもぜひ取り入れていってほしい取り組みである。

ここには書き切れていないが、実習の中では実際に災害と関連する伝承と東日本大震災との関連についても聞く機会があった。これらの経験を通してメディアで取り上げられないような災害の実態を伝えていくことの重要性を改めて感じた。それらは災害の現実を実感することと次の災害への備えに役立つ。そういった人々の興味を得にくい話を伝えていくことに自分も貢献できたらと考えている。

宮城・福島へ訪れて

臨床心理学領域 M2　原口泰知

震災当時、私は中学１年生だった。関東でも大きな揺れを感じ、その日は一斉下校となった。帰宅し、ニュース映像を見る。東北で大変なことが起こっているらしい。その後も、テレビから流れる情報を、ただ何となく受け取り続けた。大学生になり、東北へ旅行に行った。流されるように電車を乗り継ぎ、被災地を通過した。ボランティアに行ける機会もあった。スケジュール帳を眺め、忙しいなと思ってやめた。

大学院に入り、プロジェクトを知る。今、行かなければ。昨年は青森県下北半島へ。見たことのない景色を目に焼き付けた。ただ、それだけでは災厄の全容が見えるはずもなく、「分からなさ」は募るばかりだった。そして今年、宮城・福島への訪問が許された。スケジュール帳を眺め、忙しいなと思ったが参加を決めた。「あの日」から、ずっと分からなかった、というよりも、分かろうとしてこなかった何かを、ひとかけらでいいから分かりたかった。

＊＊＊

初日はみやぎ民話の会の交流会に参加する予定だったが、その一足先に宮城入りし、荒浜小学校を訪れた。仙台市荒浜地区では、小学校の校舎を残しほとんどの建物が津波で流されたという。その校舎が震災遺構として遺されており、被害の様子をそのままの形で見ることができる。小学校から海に向かって進んだ先では、津波で失われた住宅の基礎が保存・展示されていた。見てみると、当時の家はほとんど跡形もなく流されたことが分かる。むき出しになったトイレだけが、ここで人が暮らした歴史をほのめかしていた。まるで古代遺跡を眺めているような気分だった。

その日の夜は、多賀城のホテル近くで夕食をとることにした。階段を 2 階に上がったところにある定食屋。入ると、地元民らしき男性客何人かが、楽天イーグルスか何かの話で盛り上がっている。「あの…いいですか？」と声をかけると、客だと思っていた一人が「おう、いいよ」と言って中へ通してくれる。彼が店主だったようだ。ミックスフライ定食を注文する。「それが一番いいよ」と店主。ミックスフライ定食なのに、刺し身が付いてきた。「お魚は、この近くのですか？」「そうだよ、すぐ近くで獲れたやつだよ。」。そうか、ここは海が近いのか。

お会計はおかみさんが対応してくれた。思い切って話しかけてみる。「ぼく、大阪の大学から来てるんですよ。いちおう、震災の勉強ということで。」。「ああ、そう…。ここもね、すごかったんだよ」。おかみさんは、堰を切ったように話し始めた。「ここは 2 階だったから助かったんだけどね。そこの階段の上の方まで波が来て。」「え、ここまでですか？！」。意表を突かれた。多賀城駅からホテルまでの道を歩いていても、正直海の気配を感じることはな

かった。しかし、ここの近くにはたしかに海があり、あの日、津波は間違いなくここを襲ったのだ。自分の無知を恥じたとともに、こんなにも何気ない町の一角に、あの日の体験が眠っていることに驚いた。

「あそこに自転車あさひがあるでしょ。前は別のお店だったんだけど。そこの看板に、津波に流された小２の女の子がしがみついててね。主人が自分の体にロープをくくって、助けにいこうとしたんだけど、底が深くてだめで、どうしようもできなかった。少し経って、別の人がその子を抱えてきて、店にあげてくれたんだけど。もう低体温で、ぶるぶる震えてたの。かわいそうだった。」。「その子は、結局どうなったんですか？」…とは、聞けなかった。自転車あさひの方を見つめるおかみさんの目には、あの日の景色が流れているのだろうと思った。

おかみさんは続けた。「窓の外が真っ赤になって、何かと思ったらコンビナートが燃えてたの。」「店の前の道が大渋滞になってね。トラックの運転席からは津波が見えて逃げられたんだけど、乗用車からは低くて見えないから。そのまま流された人もいたよ。」「この辺りでも、何人も犠牲になったよ。」「生きてるうちにこんなことになるとは思わなかった。」。それでも、語りには逞しさがあった。「もう、運命だよね。日本ならどこにいても起きるでしょ。」。誰も他人事ではない。だからこそ、今ここで、この私に向けて、何かを託そうとしてくれているような気がした。「がんばってね。がんばってね。」。何に対してかは分からないが、彼女はそう繰り返した。なぜだか分からないが、胸が熱くなった。「ありがとうございます。また来ます。」。なんと言ったらいいか分からず、思わずそう返した。

この５日間、町を歩き、人に出会った。たくさんのものを知り、感じた。その過程で、「現地に行って、分かる」とはどういうことなのか、見えてくるものがあった。この旅での「分かり方」は、少なくとも２つあった。

１つ目は、「分かりやすい」ものである。例えば、津波の被害を伝える震災遺構、原発問題を訴えるミュージアム、あるいはNHKのニュース。発信者それぞれの立場や目的により構成された情報を、私たちは受け取る。さまざまな発信者から受け取ることで、複数の現実が見えてくる。一方、並べられた現実のなかで、どの現実が、どの程度「ほんとうのこと」なのか分からなくなるときがある。どれだけ分かろうとしても、「ピンと来ない」ことがある。分かりやすく与えられる情報を、「この私」に届かせるためには、もうひとつの「分かり方」が必要であったと思われる。

２つ目の「分かりにくい」ものは、暮らしを営む人々の中にある。あるいは、復興のシンボルや、展示物としてではない、本当の意味で放置され、忘れ去られた町の中にある。立ち止まり、黙り込むばかりでは、何も与えてはくれない。だが、私が一歩踏み出したとき、物言わぬ空き家は、雄弁な展示物よりも遥かに現実を物語ることがある。私が一言差し出したとき、市井の人の応答は、どんな映像にも勝る迫力で現実を目の当たりにさせることがある。こういうものに出会ったとき、「これがほんとうのことなのだ」と私は思う。「少しだけ、分

かることができたかもしれない」と思う。
　言うまでもなく、この２つの「分かり方」はどちらも大切であり、両者を往復していくことで社会に対する理解を進めていくことができるのだと思う。

＊＊＊

　３・１１とは一体なんだったのか。今の私が自信を持って言えることは驚くほど少ない。ひとつあるとすれば、「あの日」から今日に至るまでの私は、ただ一人の「受け手」にすぎなかったということである。それは今回の訪問でも変わらなかったかもしれない。だが、機会に恵まれ、かつ自分が勇気を出して、「主体的な受け手」になろうとしてみたとき、間違いなくそこにある歴史―現実や、逞しく愛おしい人々の想いに触れることがあった。よく分からないものを分かっていくためのやり方を、今回の実習を通して教わったと思う。

　この社会の抱える矛盾は果てしなく、私たちの世代もまた、その矛盾を引き受けていくことになる。これからも、私たちにはいくつもの危機が訪れるだろう。そんな時、このプロジェクトに参加した２年間からいただいたものが、きっと思い出されると思う。それを再び、自分の周りに伝え返していくことができたらどんなにいいだろう。

「東日本・家族応援プロジェクト＋2022」に参加して

博士後期課程　河野暁子

今年から新たに始まった「東日本・家族応援プロジェクト＋2022」には、3 日目の白河のプログラムから参加した。途中、新地町、浪江町、富岡町、楢葉町の公立図書館を訪ねながら、白河市へ向かっていくことにした。公立図書館に立ち寄ろうと思ったのは、福島第一原発事故関連の書籍が、どのように配架されているのかに興味を持ったからだ。原発事故のコーナーを特設していたり、背表紙に事故関連の書籍だと分かる印が貼られていたり、様々な工夫が見られた。車のナビで出た双葉町の図書館にも向かったが、付近に人は住んでおらず雑草が生い茂った様子に、改めて悲しい気持ちがわいてきた。

白河市のプログラムは、白河市立図書館で行なわれた。図書館内の開けたスペースで漫画展が行われており、多くの人が立ち止まって漫画を眺めている様子が見られた。遊びのひろば、ふるさとの民話、ライアー演奏等々のプログラムは、どこかなつかしい気持ちにもなった。午前中のプログラムを終え、昼食にはコミュニティ・カフェ EMANON を訪ねた。昨年度からお世話になっているカフェであり、落ち着いたほっとする雰囲気である。午後は団先生の漫画トークと交流会であった。原発事故当時のお話を聴かせていただくこともでき、このようなお話を自分事として考えていかないといけないと感じた。

翌日は楢葉町の宝鏡寺にある伝言館を訪ねた。館長と副館長のお話は、平和とは何なのか自ら問いかける時間となった。その日の午後は、沿岸部から飯舘村までのフィールドワークを行なった。昨年までよく見られたフレコンバッグが、今年はまったく見当たらなくなっていたのだが、移動しながらよく見てみると、在る所には在るのだということが分かった。

最終日は、古滝屋の考証館見学とスタディツアーであった。夜ノ森駅周辺を歩くと、人が住まなくなった家に空き巣が入った跡があり、なんてことをする人がいるのかと暗い気持ちになった。被害に遭われたお宅の悔しさは計り知れない。

プログラムをすべて終えた後、村本先生、団先生といわき市にある双葉町役場や小中学校を訪ねることになった。ちょうどこの日、中学生たちが初めてかつての双葉中学校を訪ねてきたとのことだった。双葉に住んでもいいと呟いた生徒がいたとのことだった。

今年も限られた時間の中で、とても多くのことを学ばせていただいた。今後も福島へ通い、考え続け、行動していきたいと思った。

最後に、今回の福島プロジェクトでお世話になりましたすべての方々に、心より感謝申し上げます。